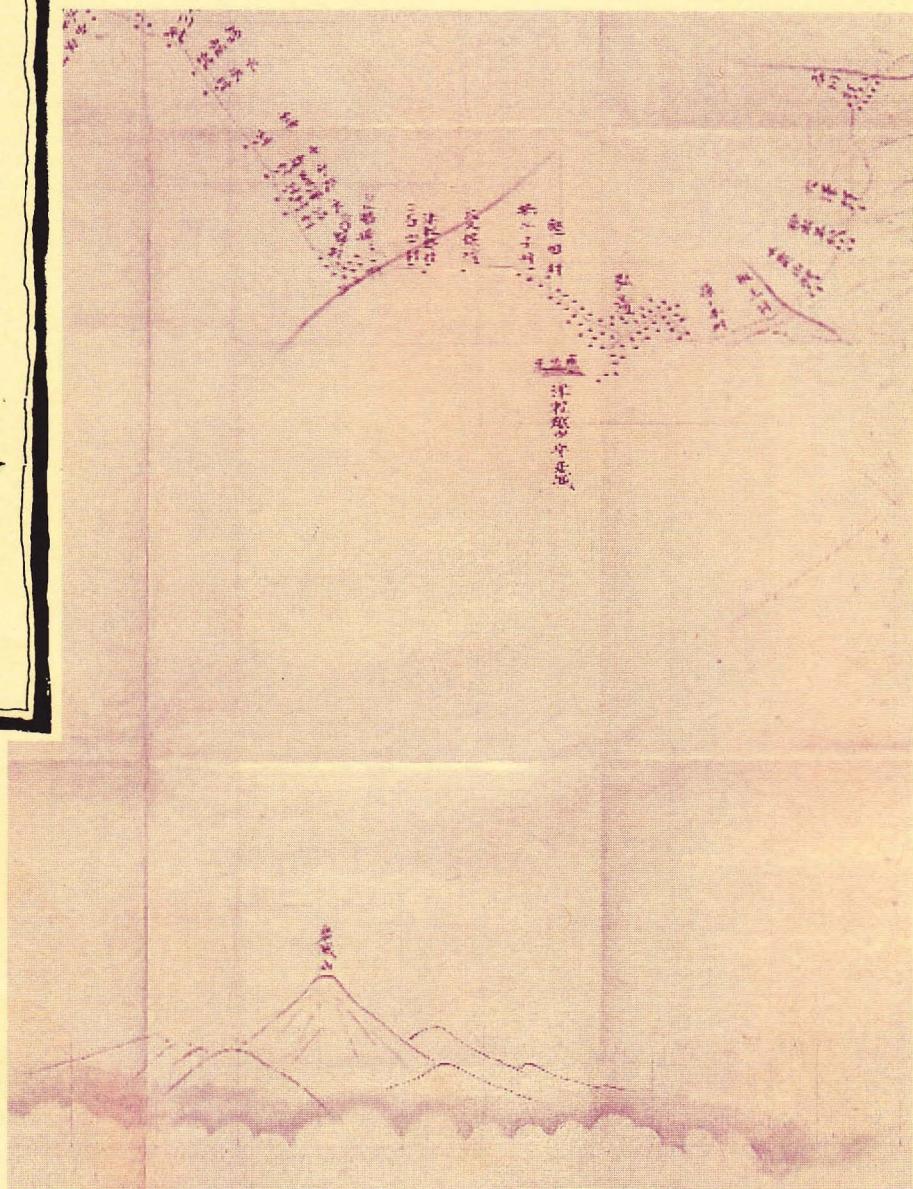


伊能忠敬研究

史料と伊能図



二〇一〇年 第五九号

伊能忠敬研究会

表紙図解説 米国議会図書館所蔵

伊能大図第43号（部分）弘前・岩木山

画面の関係で弘前と岩城（岩木）山が上下になつてゐるが、これだと左方向が北で、北を上にすれば弘前が右（東）、岩木山が左（西）という位置関係である。享和二年（一八〇二）、第三次測量で、羽州街道を青森へ、青森からは湾岸を北上、津軽半島を回つて日本海岸を十三浜、鰺沢方面へ南下する。

裾に雲をまとつた岩木山が際立つ。奥羽（陸奥・出羽）境の碇ヶ関を出立、石川村を経て弘前に至る。石川村辺で津軽平野に出ると、水田と岩木山の展望が開ける。日記には「田地広長」「道直道正面二岩城山ヲ見ル」「右ニ岩城山ヲ見ル」「左山際へ四五丁五六丁田地」など、沿道村々の田畠と山の風景が克明に綴られている。弘前泊は八月八日である。

弘前城下では宿に領主からの菓子折りが届いていたものの、到着時の町役人の出迎えもなく、宿の扱いも粗末であつた。役人を呼ぶがようやく来たのは要領を得ない町年寄、藩内の道法、止宿先、三厩から的小泊越に運びきれない長持ちの別送など交渉に難渋する。加えて領主が青森に滞遊中のため青森止宿も心許ない。道中奉行勘定奉行の御触があつたはずなのに等閑と難じている。結局青森ではなく油川泊となり、同所到着後青森までを測つた。油川には津軽藩士で忠敬に弟子入りした松野茂右衛門が來訪、彼の案内で青森の山鹿八郎左衛門方へ出向き面会、青森泊への変更を懇意されるが、天測準備済みの油川をとる。松野は第五次測量の見送りにも出たほか、江戸日記によればしばしば黒江町を訪れており、忠敬も本所の津軽屋敷に松野、山鹿を何回か訪ねている。

鈴木純子（題字は伊能忠敬の筆跡）

巻頭

史跡探訪9「伊能忠敬先生宿泊之地碑」

話題I

『測地原稿図』
寅年にちなんだ地名

伊能測量二二〇周年に寄せて
寅年にちなんだ地名

話題II

「傳照寺」—伊能忠敬宿泊の家

伊能大図総覽の地名と景観（十三）

伊能忠敬の生涯と業績・テレビ放映
伊能忠敬にまつわる二つの石の物語

追悼
三巨星逝く

研究ノート

伊能忠敬研究（九）忠敬の見た風景

榎本武揚の時代と語学

柏木家文書（五）

名著『伊能忠敬』（三）

伊能塾講座

柏木家に残された忠敬資料
伊能測量漫筆

支部便り

九州支部研究旅行「島原大変肥後迷惑」

佐原支部懇親会

辻本元博 馬場良平

お便りから 日々の話題 お知らせ

編集部

五九

香取 清一

五六

柏木 隆雄

五〇

渡辺 一郎

五三

伊藤 栄子

三六

柏木 隆雄

四二

前田 幸子

四五

石谷 春香

二六

伊藤 栄子

二一

柏木 隆雄

二四

渡辺 一郎

二四

河島 悅子

二二

佐久間達夫

一八

斎藤 仁

二

五 四 二

五

星埜 由尚

七

國重 正樹

一

史跡探訪9

伊能忠敬先生宿泊之地碑



2010.01.25

石碑の正面は「伊能忠敬先生宿泊之地」、横面は「文化9年6月28日 出口庄村屋七郎左衛門宅 伊能忠敬先生測量日記に依る。背面は「昭和49年3月建之。天ヶ瀬町教育委員会」(伊能忠敬先生宿泊の地・庄屋七郎左衛門宅に立つ石碑と国重正樹会員)

◇所在地 大分県日田市天瀬町出口 ◇設立者 旧天瀬町（平成十七年日田市に編入合併） ◇設立年月日 昭和四九年三月 ◇設立目的
伊能忠敬測量隊が宿泊した地を記念し、町の遺産とするため

案内人

福岡市南区在住 国重正樹

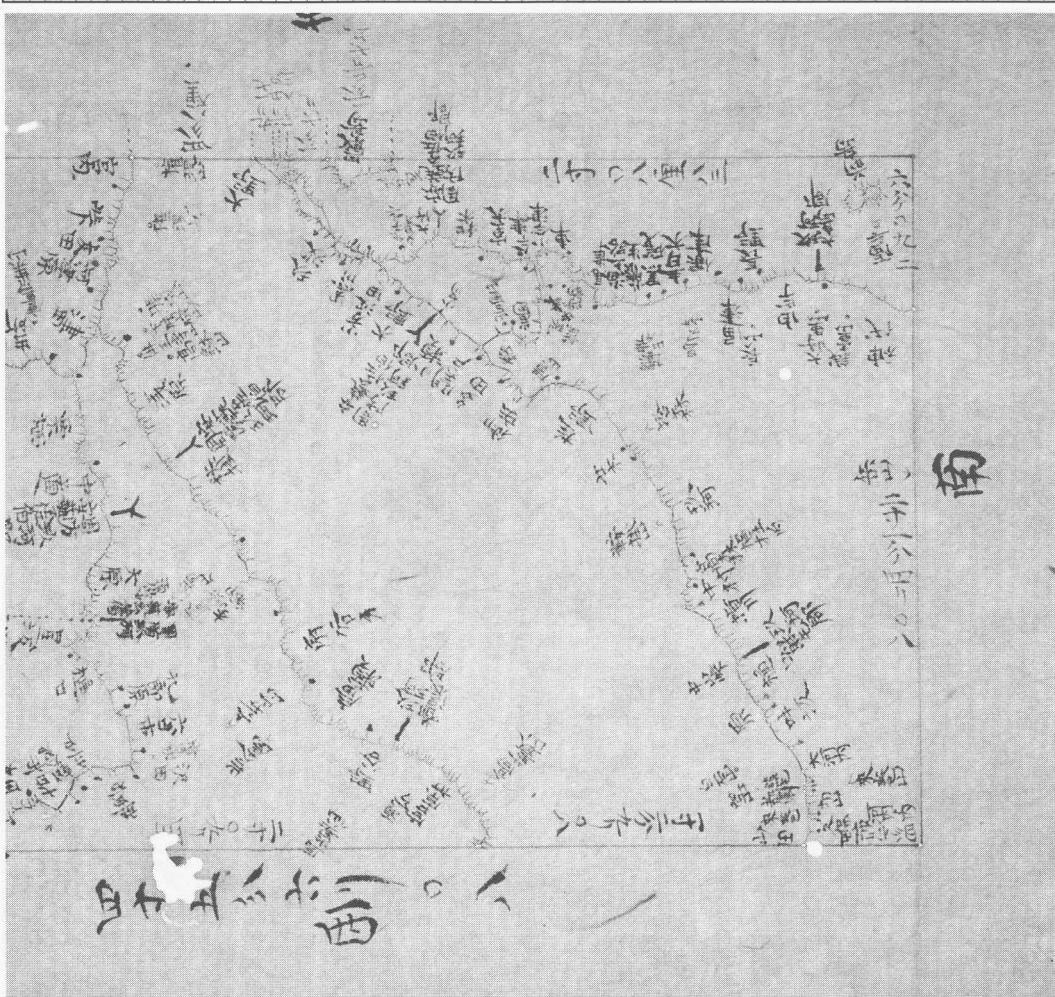
大分県日田市に「伊能忠敬先生宿泊之地」碑があります。この石碑は会報『伊能忠敬研究』第五六号に佐久間達夫氏の執筆で掲載されました。が、今回現地を訪れて実地に見てきましたので紹介します。

『測量日記』によりますと、文化九（一八一二）年六月二八日、伊能測量隊一行は肥後から日田往還を通じて豊後入りし、日田盆地を測量して天瀬町出口の庄屋七郎左衛門宅に宿泊しました。「伊能忠敬先生宿泊之地碑」はこの七郎左衛門宅の敷地の一隅に建てられています。翌二九日、測量隊は大山町の三光山傳照寺に宿泊し、そのあと七月二日に福岡に至つて福岡藩の浦方下役・青柳種信と初めて出会いました。この際の経緯については会報第五二号の拙文で紹介させていただきます。が、青柳種信は藩命により案内役として測量隊に付添い、その学識の深さを忠敬に絶賛された人物です。私は青柳種信を郷土の偉人として誇りに思い、大学院で種信について修士論文にまとめました。その後も忠敬との交流など種信の研究をライフワークとしています。二〇〇四年十一月、「アメリカ伊能大図里帰りフロア展」が福岡で開催された際、石川清一支部長と会場でお話したのが縁となつて伊能忠敬研究会に入会しました。今回日田を訪れて、伊能測量隊の足跡を記念する石碑が郷土の遺産として現在も守られ、残されていることをうれしく思いました。会員の皆さんもぜひ現地を訪れて伊能測量の場所と記憶を共有していただきたいと思います。

【六頁「傳照寺—伊能忠敬宿泊の家」も併せてお読みください。】
（くにしげ まさき・青柳種信研究家）

日田市「伊能忠敬先生宿泊之地碑」を訪ねて

針穴が残る忠敬の測量下図――



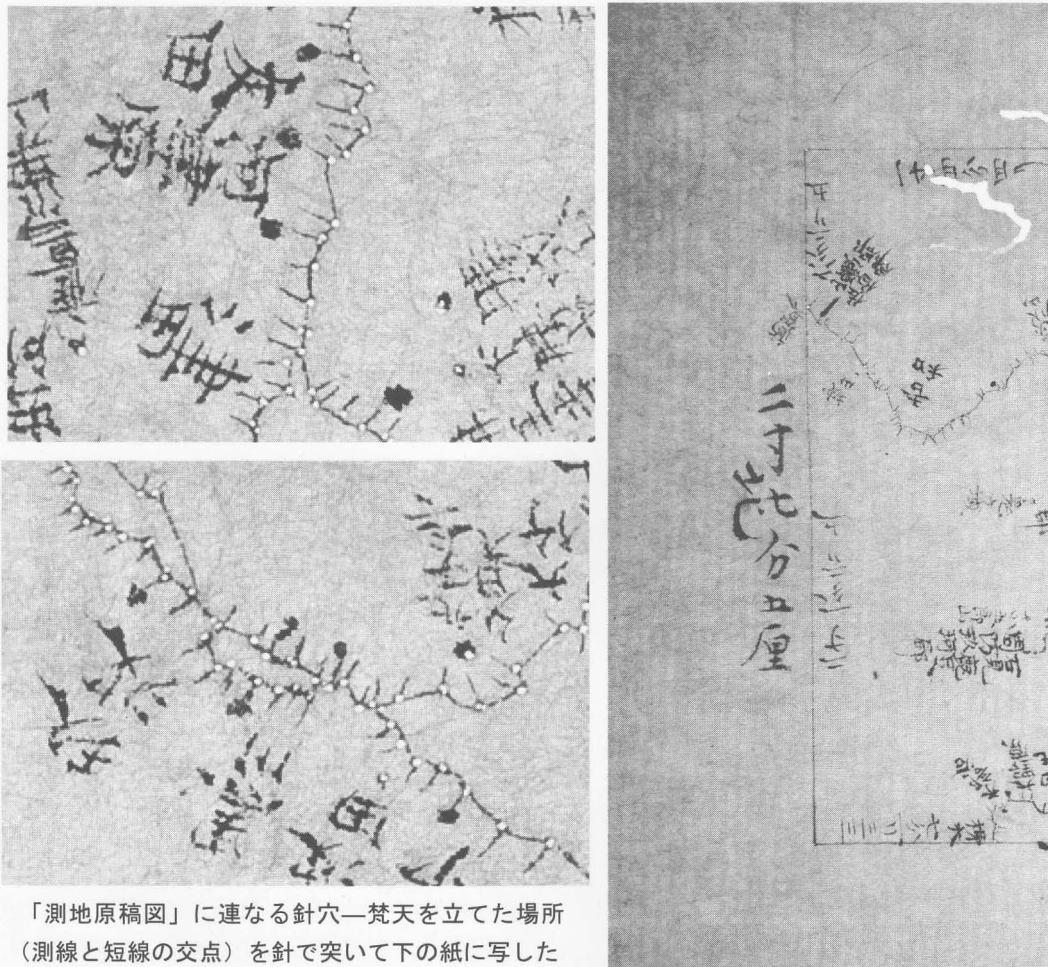
伊能忠敬『測地原稿図』

伊能忠敬が作成した測量下図は『測地原稿図』と題して東京大学総合図書館に九四枚所蔵されている。掲載図はそのうちの一枚、中国第六番「周防」である。同様な形式の下図は芝公園の三康図書館も所蔵しており東大の原図の欠番と接続する部分があることがわかつているほか、佐原の伊能忠敬記念館に測量下図として整理されている。

下図は測量作業の単位となるブロック毎に美濃紙程度の大きさの用紙に分割して記載し、方位線の目標となる著名な高山・島などの位置も記している。この図の下に地図用紙を置いて屈折点と目標点に残つてある針穴を上から針で突いて穴を開け、測線と主要目標の描画位置を写すのが、伊能図作成の特徴的手法の「針穴法」である。

紙質は丈夫な和紙であるが、裏から見ると墨線に沿つて針穴が無数に連続しており、縮小度

『測地原稿図』——無数の



「測地原稿図」に連なる針穴—梵天を立てた場所
(測線と短線の交点) を針で突いて下の紙に写した

の大きい小図の原図ではギッシリと針穴が連続している感じである。よく穴が連続して破れてしまわないものと感心する。余程丈夫な紙質の紙を選んでいるのである。また、簡単なように考えられる針穴による複写は細かい作業の連続であることがわかる。針穴からみて、本図は何回か使用されたよう見受けられる。対象地域はばらばらで、ある特定の地域あるいは時点の測量結果ではない。もとは大量に存在したが散逸してしまった残りであろう。用紙のサイズは大小の二種類にほぼ統一されており、描画形式は一定であるが、タイトルや範囲、枠、作業日、作業者名などの書き込みはまちまちであり、多数の人々の合作であると思われる。これらの測量下図の集大成として『大日本沿海輿地全図』が完成した。(渡辺一郎)
(詳細は会報第32号を参照)

伊能全国測量二一〇周年を迎えて

代表理事 星 桀 由 尚

西暦二〇〇〇（平成一二）年には、伊能忠敬先生の全国測量開始二〇〇周年を記念してさまざまな顕彰の催しが行われたことは記憶に新しいところです。三年かけて忠敬先生の測量のあとを歩いた伊能ウオーカー、江戸東京博物館における「伊能忠敬展」、「伊能忠敬物語」の上演とその映画化などが行われ、広く日本国民に忠敬先生の偉業を知つていただきました。

その後も、渡辺一郎名誉代表によるアメリカにおける伊能大図模写図の発見があり、東京国立博物館における「伊能忠敬と日本図」展とそれに引き続く仙台、神戸、熱海、名古屋等での伊能図博物館展、伊能洋さんの指導により彩色したアメリカ大図のフロア展が全国各地で催行されるなど伊能忠敬ブームが続きました。そして、平成一三年には広く浄財を集め、富岡八幡宮に忠敬先生の銅像を建立することができました。また、伊能大図の全体像が明らかになったこともあり、平成一八年の暮れには「伊能大図総覧」が刊行され、伊能図に関する知識が集大成されました。

昨年には、新たにコンピュータにより彩色復元した伊能大図原寸バーネルが日本写真印刷株式会社のご努力により完成し、これまでに東京深川、横浜、さいたま市与野において大図、中図、小図を揃えた「完全復元伊能図全国巡回フロア展」が開催され、多くの方々に見て頂くことができました。二一〇周年を迎えた本年も東京小金井はじめ全国でフロア展を開催することが予定・計画されています。

伊能全国測量二一〇周年を迎え、現在の世相を思うとき、愚直なまでの忍耐・努力を身を以て示し、人のため世のための仕事に没頭した伊能忠敬先生の生き方や業績にさらに目を向けるべきであると強く思う次第です。

これまで伊能忠敬先生の業績を広く世に普及させることに情熱を燃やし、貢献してきた安藤由紀子さん、伊能陽子さん、佐久間達夫さんが二一〇周年の年に入り突然鬼籍に入られました。誠に残念の極みであり、深く哀悼の意を表したいと思います。これまでの伊能忠敬研究に対するご貢献に感謝するとともに、御三方のご冥福を心からお祈りいたします。

（ほしの よしひさ・日本測量協会副会長）





「傳照寺」——伊能忠敬宿泊の家

國重正樹

二〇一〇年一月二十五日 曇り 午前九時、九州支部長・石川清一氏の運転で福岡を出発。九州・大分自動車道を利用して日田I・Cでおり一般道へ。目的地は『伊能忠敬研究』(第五六号一二一)二七頁 佐久間達夫氏(記載の大分県日田市大山町傳照寺である。

『測量日記』（九州第二次）によると文化九（一八一二）年六月二八、二九日忠敬は出口村を測量し、二八日は庄屋七郎左衛門宅に宿泊している。二九日、七月一日は続木村を測量し、二九日は傳照寺に宿泊している。

傳照寺
(淨土真宗本願寺派)

住職原説丸氏の丁重な説明
番地 傳照寺 ◇ 設立者 大山町

と案内をうける。寺の過去帳には六月二九日の欄外に

「天文方高橋作左衛門手附

測量方伊能勘解由、同手傳

坂部貞兵衛、下役永井甚右

衛門、今泉又兵衛、門谷清治郎
已止下士、御差下肥後

ヨリ申六ノ廿九日當寺止宿

写真の標柱は「朽ちたので
建替つた」との事。石碑に
ついては同境内ではなく、



【説明版】「伊能忠敬宿泊の家」

文化9（1812）年6月、徳川末期における測量学の大父・伊能忠敬の一行9名が九州地踏査の際に肥後地より北上、日田へ行く途中に三光山傳照寺に宿泊された。大山町文化財調査委員会

出口にあると案内していただいた。

測量隊は小国（肥後國）・日田往還経由で日田郡に入り、日田盆地（市街地）に向かつたのである。当時の人道は山の中腹か尾根にあることが多く、その方が安全な道で近くもあつた。

傳照寺のある続木村は江戸時代の正保郷帳には「田高五一石・畠高一〇四石、いづま五馬庄に属し、日損所」と記され、田の用水に恵まれず、多く天水に頼っていた。住職の話では「寺は高度四〇〇mの処にあり、日田より温度が一、二度位低く、水は甕に入れて濾して使っていた」そうである。

山道続きの「測量行」は苦労の多いものだったと想像される。車社会の現在では行きやすい処である。一度訪ねて伊能忠敬と同じ場所を共有するのはいかがであろうか。



石川氏所有の伊能中図より

伊能大図総覧の地名と景観（十三）

星 桀 由 尚

西伊豆の海岸

西伊豆は、第二次測量により測られた。享和元年（一八〇一）五月一七日下田を出発した測量隊は、石廊崎を経て長津呂村に一九日に止宿、二〇日には入間村中木で二手に分け、忠敬は舟に乗り海岸の遠測を行つた。入間村で落ち合い、再び忠敬は舟に乗り妻良村に至る。妻良村から全員で乗船し子浦村に止宿した。大図を見ると、山道の測量は、かなり陸に入り込んでいる。妻良村では、子浦村の方角とその間の距離を測つている。大図では、この間は測線が途切れおり、海中引繩を行つたわけではないようである。大図では大浦村と記されているが、これは模写時の誤りだろう。子浦村から始まる測線に短い測線の分岐があるが、この測線の先端に着船したのであろう。

清見寺と三保の松原

東海道一七番目の宿奥津に清見寺がある。清見寺の前の海は清見潟と言われ風光明媚な地であった。清見潟には白鳳年間に清見関が置かれ、その鎮護の寺として清見寺が建立されたという。

大図には、清見寺が描かれ、清見寺の注記とともに清見寺門前と書かれている。現在は、JR東海道線の背後に清見寺の境内が広がっており、国指定の名勝清見寺庭園があり、朝鮮通信使の接待所となつたところもある。徳川家の庇護もあつた名刹であり、二五〇石の御朱印を受けていた。しかし、その名は、大図に描かれているのみで「測量日記」には特に記載がない。清見寺から海を隔てて南には、三保の松原がある。現在は、海の前面に

埠頭が建設され埋め立て地となつておらず、昔日の清見潟の面影は残っていない。大図には横砂村と濁澤村の注記があるが、地形図を見る限り横砂は現存するが、濁澤は残っていないようである。

三保の松原は、大きな砂嘴の内側に二つの砂嘴の分岐があり、出島岬と辨天岬の二つの岬の注記がある。出島岬には砂嘴の中にできた潟湖が描かれている。三保社と羽衣明社の注記があり、現在の御穂神社、羽衣の松に対応すると考えられるが、地形図と対照すると、三保社の位置は現在の位置より北に

よつて描かれて

いるようである。

三保村、折戸
村は、神領と
記されており、
「測量日記」に
は三保明神と
記されている

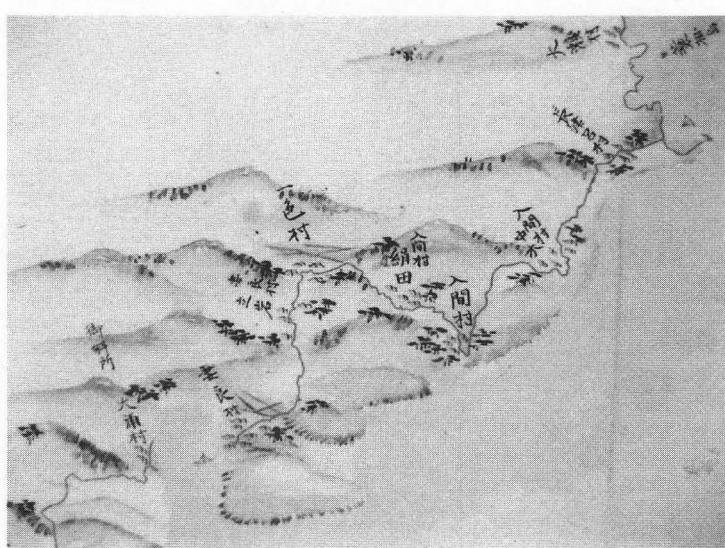
三保社の朱印

地であった。

神領百六石と
は記載されて

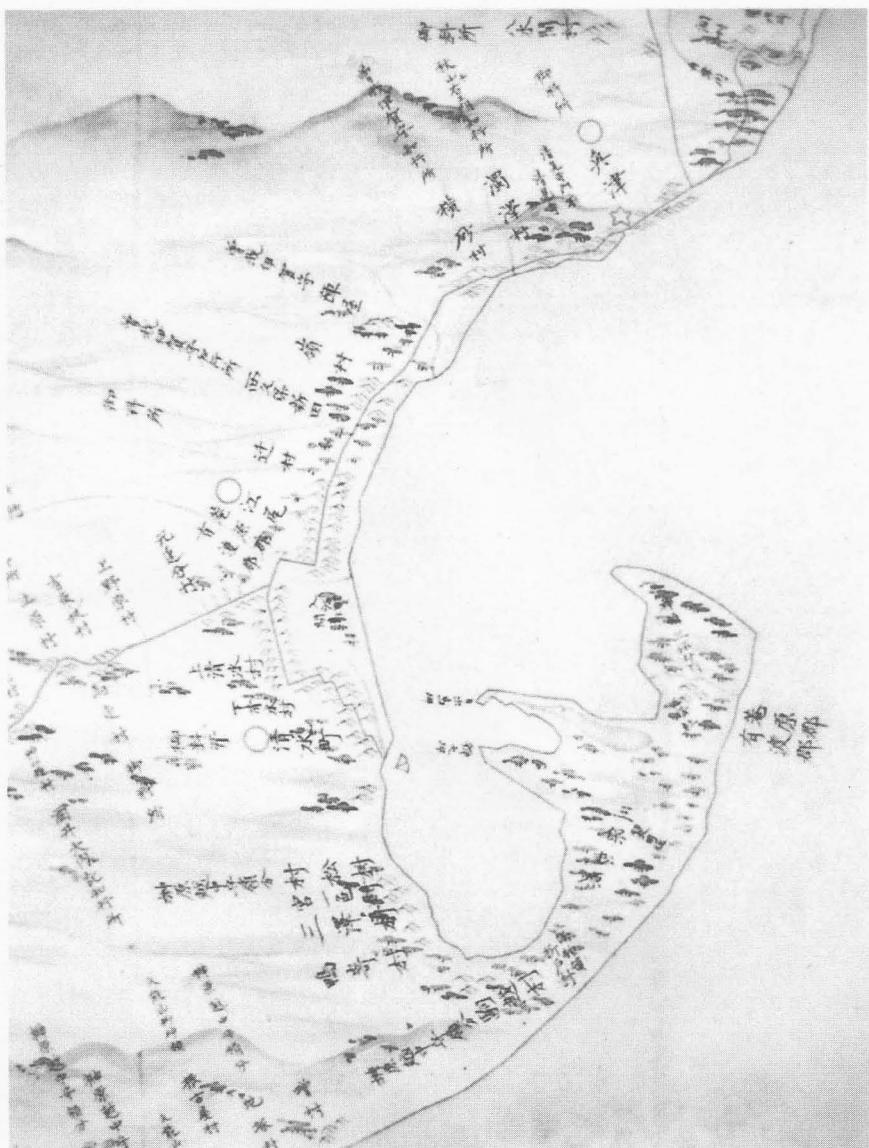
おり、三保村、
折戸村などは

庵原郡であった

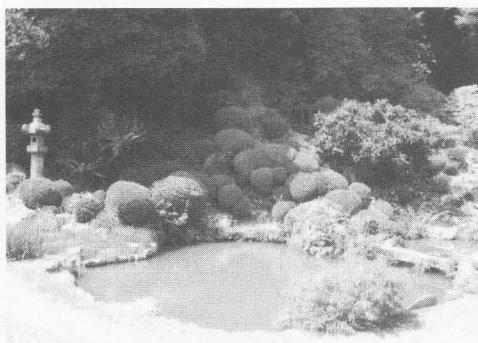


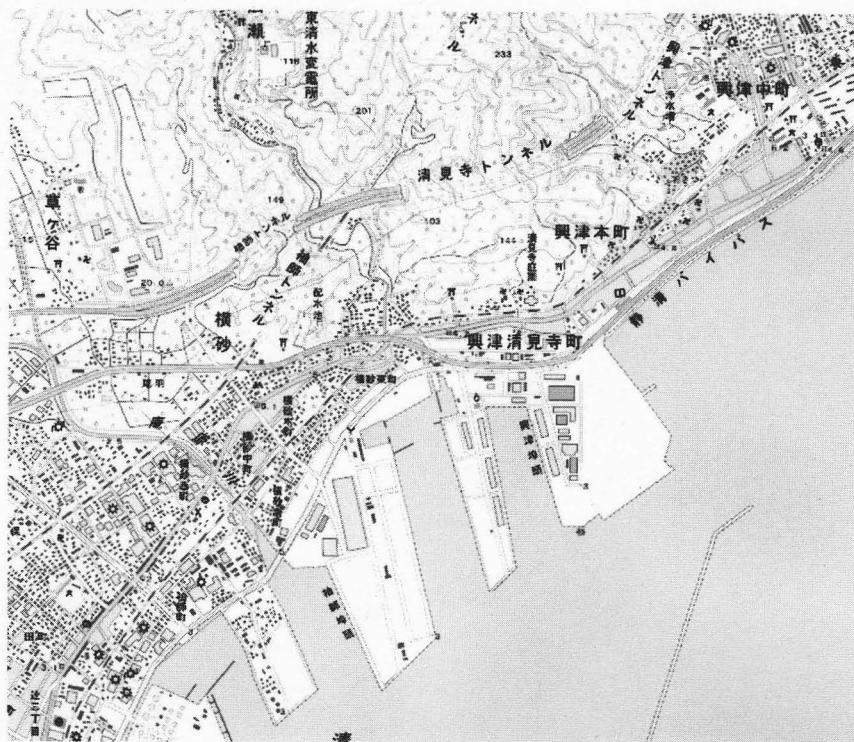
第1図 大図102号 妻良周辺

第2図 大図107号 奥津、清水、三保松原

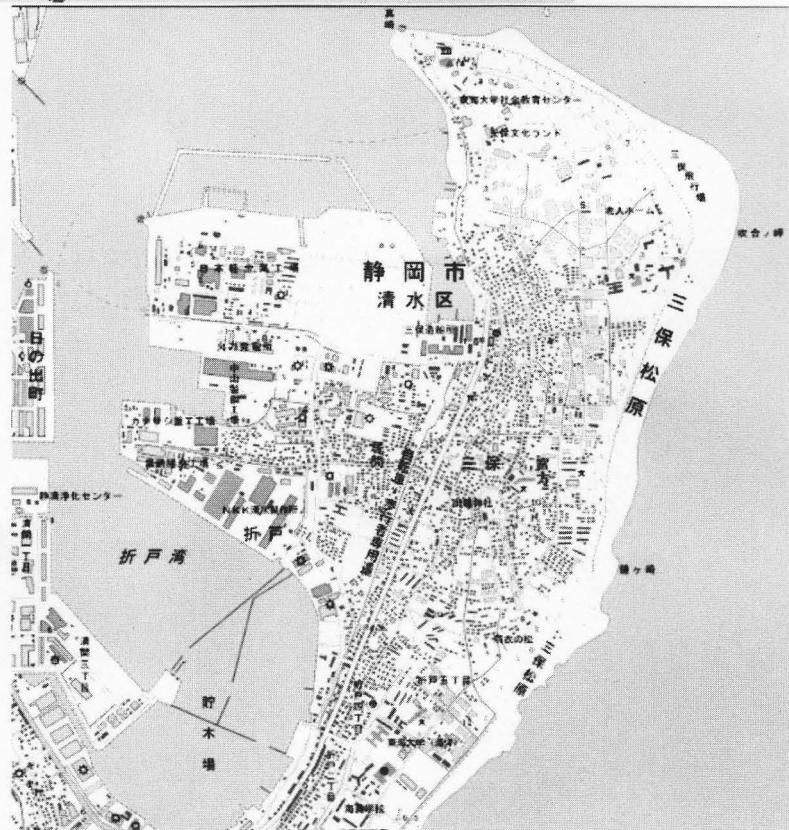


右・第3図 清見寺
左・第4図 清見寺庭園





第5図 2万5千分1地形図「興津」、「清水」の一部

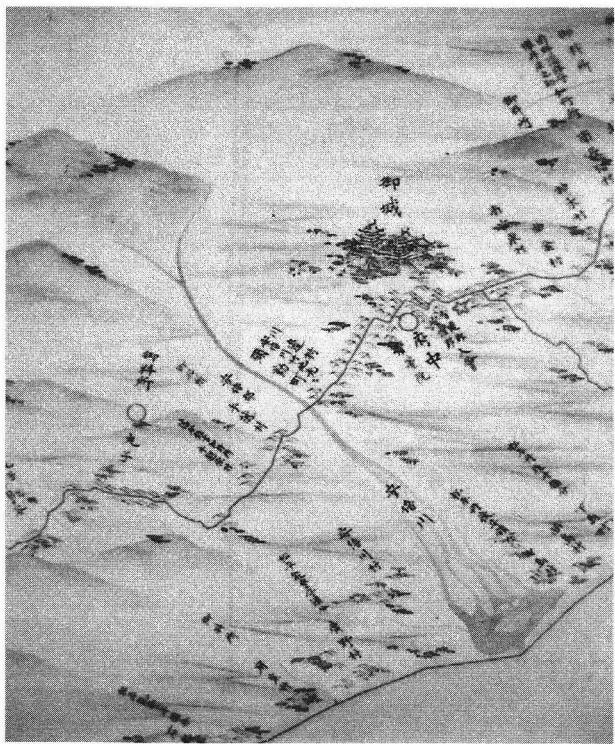


第6図 2万5千分1地形図「興津」、「静岡東部」の一部

現代の地形図を見ると、伊能測量の時代とは大きく変わり、大図から當時は一面の松原であったと推測されるが、現在は、二つの派出した砂嘴は埋め立てられ、大きな工場が立地し、小さな潟湖も跡形もない。砂嘴の上は、住宅や温室などが所狭しと並び、その中にかろうじて御穂神社、羽衣の松が残り、砂州の外側に三保松原があり、観光地となっている。

駿府

駿府は、第四次、第五次、第八次と通過している。第四次においては、三保から海岸線に沿つて久能山の周囲を廻り、府中に止宿して、再び海岸線の測量を行つていている。この時は、久能山下の大谷村から府中まで量程車を

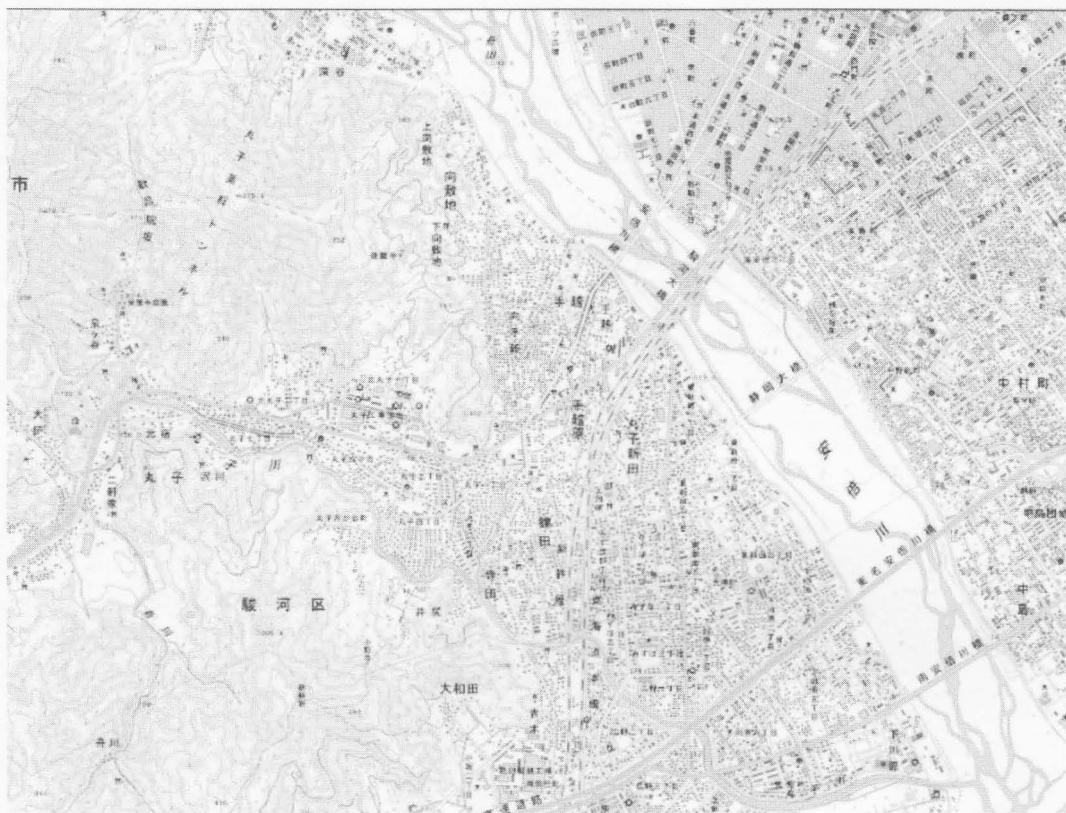


第7図 大図 107号 府中付近

用いて測量していることが「測量日記」には記されており、大御所家康の駿府では測量作業においても気を遣うことが多かつたのであろう。第五次においては、東海道の測量を行い、江尻に止宿して丸子まで測量し、府中には泊まつていない。この時には、原宿から府中を抜けるまでの間に、三宝院門跡、勅使、院使の一一行、紀州侯、細川侯の行列に遭遇している。三宝院門跡とは「相会」と「測量日記」には書かれているので、挨拶したのであろうか。第八次においては、府中は無測で通過している。

大図には駿府城が府中の町を睥睨するように描かれている。言わざと知れた徳川家康が隠居した城である。他の城と異なり江戸城と同じく御城と注記されている。天守閣や櫓が描かれ、石垣と木々に囲まれた立派な御城である。

府中には、家並みが東海道に沿つて連続して描かれている。寶臺寺という寺院の注記があるが、宝台寺は静岡駅の近くに現存する。宝台院には、二代将軍秀忠の生母西郷局の墓がある。駿府には、今川家、徳川家にゆかりのある寺院も多いが、大図に記載されているのはこの寶臺院のみである。富士山の周囲には多数書き込まれている浅間神社もここでは注記がない。府中から安倍川を渡るが、安倍川は大井川と同じく徒渡りであった。府中側の彌勒町には、川会所と高札場があった。安倍川餅の発祥地である。安倍川を渡り、丸子宿は、とうろ汁が名物で、広重の浮世絵でもあまりにも有名である。しかし、「測量日記」にはこれらのが一切触れられていないのも面白い。



第8図 2万5千分1地形図「静岡東部」、「静岡西部」の一部

御前崎

第9図は、御前崎の部分の大図である。半島主要部は、アメリカ大図では111図にあり、岬の部分は国会大図の第107図であるため、やや接合に難があるが、双方とも彩色された美麗な図である。

御前崎の先端は、手のひらのような形をした岩礁の突出が絵画的に表現されている。測線はその内側を通過しており、地頭方村御前崎の集落が描かれて天測の記号があり、そこまで測線が延びている。

御前崎の沖には点々と岩礁が描かれており、その先端には沖御前と注記された島が描かれている。地形図には、御前岩という灯台のある岩礁が存在しているが、御前崎と御前岩の間には岩礁は一つも描かれていない。御前崎は、来るべき東海地震の対策に必須の観測データを提供している場である。国土地理院では、御前崎の地殻変動を様々な先端機器と技術を用いて継続的に観測している。御前崎は平時岬に向かつて徐々に沈降しているのであるが、地震時には隆起が勝つて岬となつている。しかししながら、伊能大図に描かれた岩礁は、すべて現在の地形図では消え去り、沖御前(御前岩)のみが残っているのは、このような地殻変動との関係においてどのように考えればよいのであろうか。次の東海地震では、一〇〇年前に見えていた岩礁が再び姿を現すことになるかも知れない。

◆第12回「地図力検定試験」より◆ うでだめし



問題 次の名称または通称を記した地図のなかで、最も時代の新しいものはどれか、①～④のうちから一つ選べ。

- ① 行基図
- ② 伊能図
- ③ T O 図
- ④ ポルトラノ海図

解説 行基図・行基(六六八～七四九)が作った図を基にしたとされている。

平安時代から桃山時代(八～十六世紀)にかけて作成された倭を積み重ねたような図柄の地図類。

伊能図・伊能忠敬(一七四五～一八一八)および彼の後継者が、幕命により一八〇一(一八〇〇)～一八二二に行つた測量成果を基に作成した地図類、

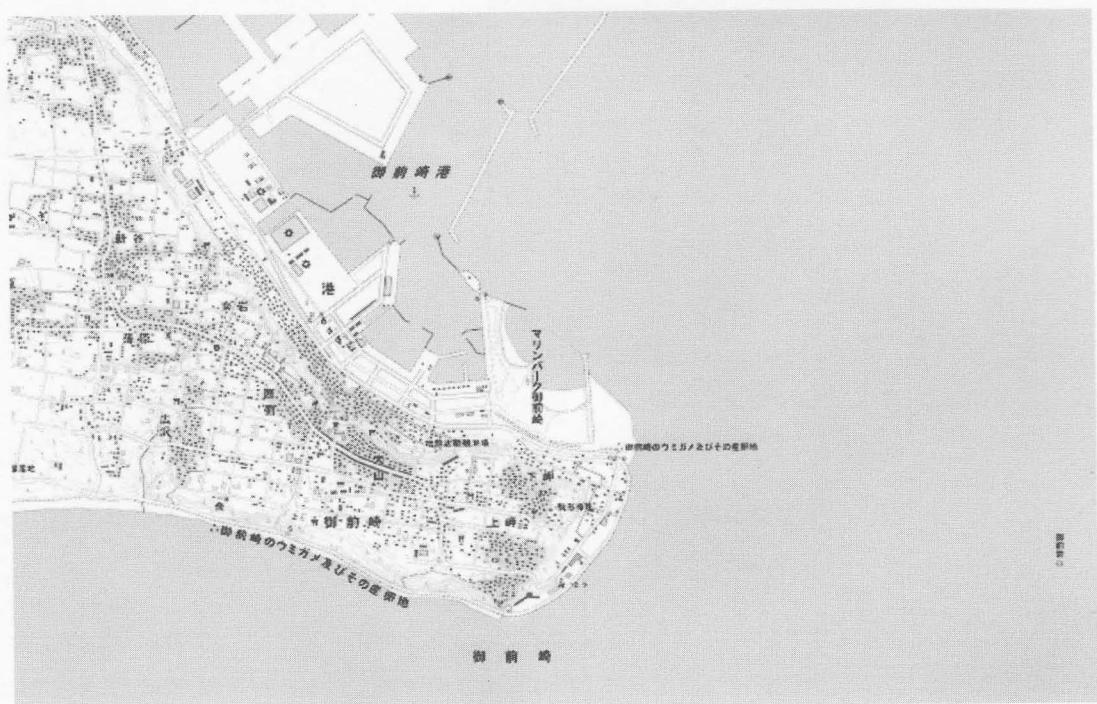
T O 図・O字型の枠に内接したT字型の水部を入れて旧約聖書の世界觀を表した主に中世ヨーロッパ(一〇～一四世紀)作られた地図類、

ポルトラノ海図・航海に磁針が使われるようになってベネチアやジェノバなど地中海沿岸の商業都市で盛んに作られた地図類、図面各所に描かれたコンパスローブから主要な港湾に向けて多数の方位線が描かれている。答②

(財)日本地図センター・HP「第12回地図力検定試験 問題と解説」より)



第9図 大図107号及び111号 御前崎周辺



第10図 2万5千分1 地形図「御前崎」の一部

浜名湖

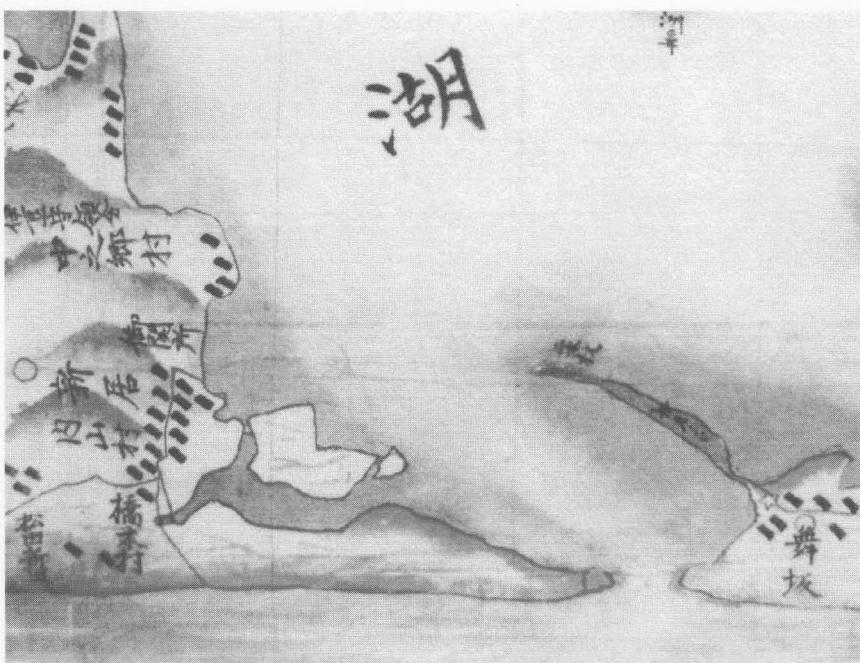
浜名湖は、第五次測量においてその湖岸線を限無く測量している。第四次測量においては、享和三(一八〇三)年三月二五日に浜松から舞阪宿に到着したのち弁天島に渡り測量している。第五次測量においては、文化二(一八〇五)年三月一七日浜松城下を出発し、舞阪宿に止宿して一八日から二八日まで約一〇日を費やして浜名湖の湖岸を測量した。第六次測量においては、文化五(一八〇八)年二月六日浜松からいわゆる姫街道を測量し、浜名湖の北岸を氣賀、三ヶ日等を通過して豊川に抜けている^{*}。浜松から三方原を通る街道は、周囲に家もなく、大図に記載されている村々は、街道には面しておらずかなり引っ込んでいたことが「測量日記」には記されている。大図には、追分村、高林村、馬生村、段子川村、一本杉村と街道沿いに注記されているが、追分村以外は、家並みの記号である黒抹が描かれていない。「測量日記」においても、追分村には人家があるが、それから先は、街道沿いに人家はないと記されている。馬生村、段子川村、一本杉村は、地形図には見られない。ただ段子川という佐鳴湖に注ぐ小河川を地形図に見ることができる。この辺りは、浜松市の郊外に当たり、三方原も現在では宅地や農地が混在し、かつての姿を地形図の上で知ることは難しい。

三方原では、留印杭を残して三十町ばかり別道を戻り上島村の延命寺に止宿したが、「測量日記」には「止宿悪し」と書き残している。上島村に向かう街道は、安間街道と言い道幅が広かつたことが「測量日記」には記されている。

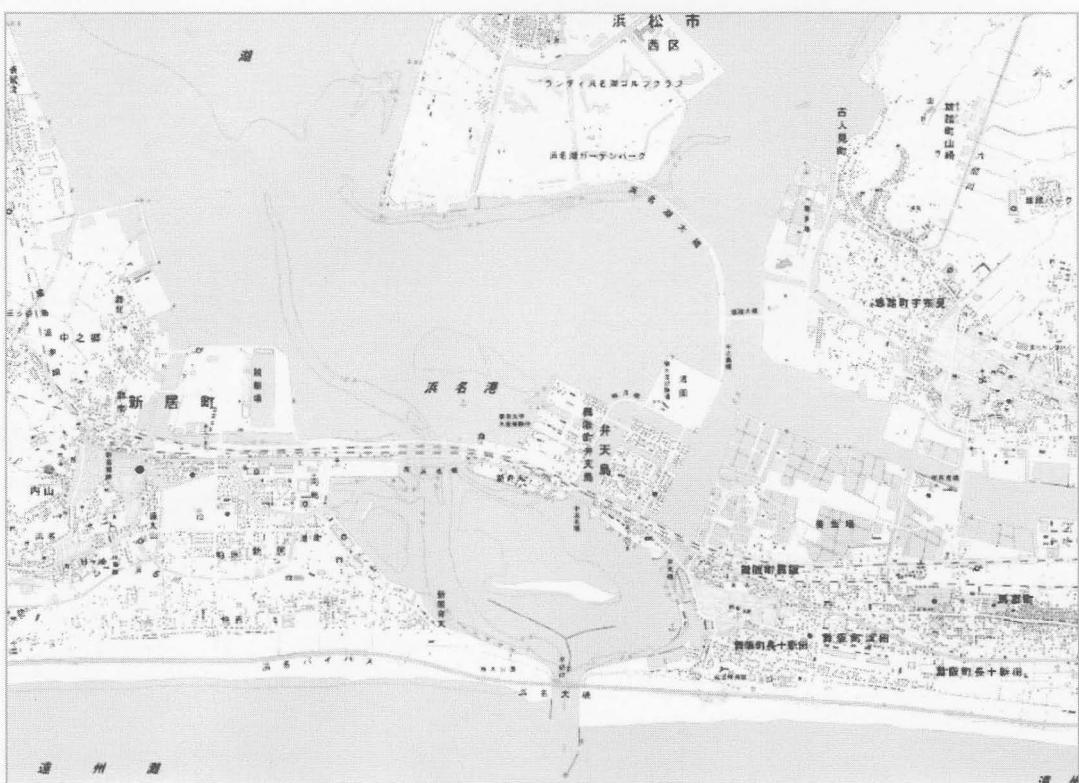
氣賀には、関所があり、旗本近藤縫殿助が預かつていて、大図にも近藤縫殿助在所と書かれた陣屋であろう甍が描かれている。大図に示されているように氣賀は、氣賀町を中心として老ヶ谷、上村、吳石村、葭本村などか



第11図 大図111号 浜名湖周辺



第12図 大図111号 舞坂、新居周辺



第13図 2万5千分1地形図「浜松」、「新居町」の一部



第14回 大図111号 氷賀周辺



第15図 2万5千分1地形図「氣賀」の一部

ら成る総称地名であった。「測量日記」によると、老ヶ谷、上村、吳石村、葭本村、小森村、下村は、往来付村であり、小森村は山根に住居、伊目村、油田村は海辺付、下村は海辺街道両方にあり、となつており、大図での集落の黒抹表現もその通りになつていて。

気賀には、都田川と井伊谷川と言う小河川が合流して浜名湖に注いでいる。この川は、大図では落合川となつており、合流点付近に架かる落合橋にその名を留めている。地形図を見ると、合流点から三角州の形態を示しているが、大図と比較しても湖岸線は変わつてゐるようには見えない。湖岸の築堤の分だけ湖岸線が前進しているものと思われるが、湖岸線の位置は二百年前と大きくは変わつてないものと思われる。大図を見ると、三角州の部分には水路が数本描かれ、黄色く彩色された砂浜が広がつていたものと考えられる。朱の測線と湖岸線の間は、湖の色と同じく藍色に彩色されている。これは、湖岸線付近は泥質の湿地であつたことを物語つてゐるものと考えていい。現在は、この三角州は、水田や果樹園となつてゐるが、伊能測量当時は、おそらく未利用の荒地であつたのではないだろうか。

浜名湖は、約五百年前の地震津波により今切の開口部が生じ、遠州灘にと繋がつたと言われてゐる。第四次測量では、遠州灘の海岸線を測量し三月二十五日には、弁天島を測量した。その後二十七日には舞阪から新居まで舟で渡つたが途中弁天島で富士山や周囲の山の方位を測つてゐる。「測量日記」には書かれていないため詳細不明だが、弁天島は周囲を測量しており、その先端まで測線が延びてゐる。

現在の弁天島は、周囲の埋め立てが進んでいける一方、かつて細長く延びていた弁天島は、水路により分断されているように見える。弁天島と今切の間に新たに砂州ができるのが地形図から分かる。大図と地形図を比較

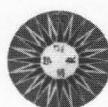
べると、今切りの海溝部も幅が狭くなり海に向かつて砂浜の幅が増してゐることが判明する。新居の側には、名前付いていない島が描かれ、測線が湖を渡つてゐるところから、おそらく湖水に縄を渡して島を一周したのである。島の周囲は埋め立てられてゐるが、水路の形などからこの島を利用して埋め立て地を造成していることが読み取れる。

掲載した伊能図のうち、大図102号及び107号は、国立国会図書館所蔵のものであり、111号はアメリカ議会図書館所蔵のものである。すべて「伊能大図總覽」から転載した。

地形図は、すべて国土地理院の一萬五千分一地形図の一部である。「測量日記」についての引用は、すべて佐久間達夫「伊能忠敬測量日記」による。

*「この間「測量日記」によれば忠敬は正月二十九日から病氣であつた。毎日「予病氣」と書かれており、二月十一日三ヶ日村を出立した日に突然「予病氣全快」と記される。

(ほしの よしひさ・代表理事・(社)日本測量協会副会長)



伊能忠敬の生涯と業績

先を競つてテレビ放映

佐久間 達夫

——誰もが胸のどこかに秘めた自分の本当の人生への願い。伊能忠敬はそれを普通なら終わつたところの五十五歳から第二の人生で踏み出しました。

傍らからは、どう見ても道が険しくとも、自分が本当にいきたかった人生。その生き生きた姿は、彼の後輩たちが墓に記したこんな一文として刻まれています。

忠敬は、星や暦を好み、決してうわべを飾らず、測量の命が下るたびに、いつも顔に満面の喜びを浮かべて、ただちに出発していった。

※後半は、佐藤一斎撰「伊能忠敬の墓碑文」を引用している。

これは、司会の関口宏がコメントして終わるテレビ番組である。

平成十四年一月十六日、佐原市の伊能忠敬旧宅で、司会の関口宏、司会アシスタント水野真紀、パネラーサトウサンペイ、片岡鶴太郎、西田ひかるが、同月二十七日に日本テレビで放映した「知つているつもり? 伊能忠敬」のビデオ取りが行われた。日本テレビの「知つているつもり?」の取材は二回目で、初回は、平成元年十一月二十六日に放映された「五十六歳からの地図作り、決死行・伊能忠敬」というクイズ形式の番組であった。

昭和天皇の崩御によつて改元された昭和六十年代前後に、井上ひさ

し氏が「週刊現代」に『四千万歩の男』という小説を連載し、伊能忠敬を事実とフィクションとをおり交ぜて私たちの身近な人物として登場させた。その後、単行本も出版され、第二の人生の生き方の手本と

「知つているつもり? 伊能忠敬」の司会者とパネラー
(伊能忠敬旧宅前にて筆者撮影)



して伊能忠敬がクローズアップされ、新聞や雑誌、テレビなどで盛んにとりあげられるようになつた(昭和五一年一二月、『四千万歩の男』『週刊現代』に連載はじめる。『単行本』昭和六一年四月発行)。

また当時、全国の自治体で『市町村史』の発行が盛んに行われ、歴史史料として伊能忠敬の「測量日記」が引用された。

そのため伊能忠敬が、前半生に生活した佐原市や伊能忠敬旧宅（伊能忠敬記念館）にも、集中的に「測量日記」の問い合わせや、テレビ取材があり、私の関係した番組だけでも、次のようなものがあった。

資料一 伊能忠敬関係のテレビ放映番組

- ・TBSテレビ すばらしき仲間 「五十歳からの挑戦—伊能忠敬の好奇心」 レポーター 柳生 博 小島一仁案内 昭和六二年一二月二八日
- ・テレビ東京 レール七・正月に備え 「この駅この街佐原駅」 レポーター 大川悦子 佐久間出演 昭和六二年一二月二八日
- ・テレビ朝日 美女紀行 「いーとこみつけた」 レポーター 大島智子 佐久間出演 昭和六二年五月
- ・千葉テレビ 地図の町佐原 宇井雙平佐原市長出演 昭和六三年五月一七日
- ・テレビ東京 特選ぶらりの旅「水郷佐原歴史旅」 レポーター 石倉三郎 相田寿美緒 昭和六三年六月一八日
- ・テレビ東京 房総薰風濁つくし路 レポーター 中野良子 佐藤蛾次郎 昭和六三年五月一八日
- ・NHK教育テレビ 歴史みつけた「地図を作った男」 レポーター 関 敏彦 昭和六三年九月二六日
- ・テレビ東京 クイズところ変われば「はかる・伊能忠敬の秘計測定」 司会 山田良一 斎藤慶子 佐久間出演 平成元年五月一九日

NHK教育テレビ「地図を作った男」

江戸の伊能忠敬宅へ間宮林蔵訪問



(伊能忠敬旧宅にて筆者撮影)

司会 関口宏 高木希世子 平成元年一一月二六日

- ・千葉テレビ 地図の町佐原「この一步から」 レポーター 麻木久仁子 伊能敬出演 平成元年六月三日
- ・テレビ東京 日曜ビッグスペシャル・おもしろ観光バスの旅「スター親子で巡る」 レポーター 桂菊丸 泉アキ 佐久間出演 平成元年六月一一日
- ・日本テレビ 知つているつもり?「五六歳からの地図作り、決死行、伊能忠敬」

- ・テレビ東京　いい旅夢気分「水郷佐原」
- ・レポーター　志垣太郎　西崎みどり　佐久間出演
- 平成二年七月一八日
- ・日本テレビ　おもいつきりテレビ「伊能忠敬の生涯」
- 司会　みのもんた　高橋佳代子
- 平成二年七月二七日
- ・NHKテレビ　歴史誕生「日本を測った男・伊能忠敬」
- 主演　川谷拓三　伊能敬出演
- 平成二年一二月一一日
- ・千葉テレビ　房総ウォツチング「第二の人生花開く伊能忠敬」
- レポーター　黒川桂子　佐久間出演
- 平成四年五月一一日
- ・TBSテレビ　ドキュメント特集東京九二「こんにちは利根川」
- 佐久間出演
- 平成四年七月一一日
- ・テレビ朝日　ひと2・地図「伊能忠敬」
- レポーター　紺野美沙子　佐久間出演
- 平成五年三月一三日
- ・フジテレビ　おはよう茨城「世界地図に載った男・間宮林蔵」
- レポーター　松本貴子　佐久間出演
- 平成八年五月三一日
- ・千葉テレビ　ときめき千葉「晩学の地理学者伊能忠敬」
- レポーター　伍代参平　井上秀美　佐久間出演
- 平成八年五月三一日
- ・日本テレビ　今その生き方が新しい「伊能忠敬五〇歳の出発」
- 主演　江守徹
- 平成八年一二月二一日
- ・NHKテレビ　堂々日本史（一）「伊能忠敬」
- 佐久間・渡邊一郎出演
- 平成一〇年六月一六日

数ある番組の中でも平成二年十一月十一日に放映されたNHKの「歴史誕生・日本を測った男・伊能忠敬」では、伊能家の当主であつた伊能敬氏が、箱根いろは坂のロケに出演するのに必要な「第九次測量で作成した箱根付近の下絵図」を探したことや、プロデューサーから岡山県の下津井（鷺羽山の麓の町）から見える四国の山々の方位を教えてもらいたいという電話があり、至急「山島方位記」を捲つて調査したこと、主演の川谷拓三が、対馬の鰐浦海岸で、足を滑らせながら岩の上にのぼり、朝鮮の山々の方位を測量したことを聞いたことなどが忘れられない。

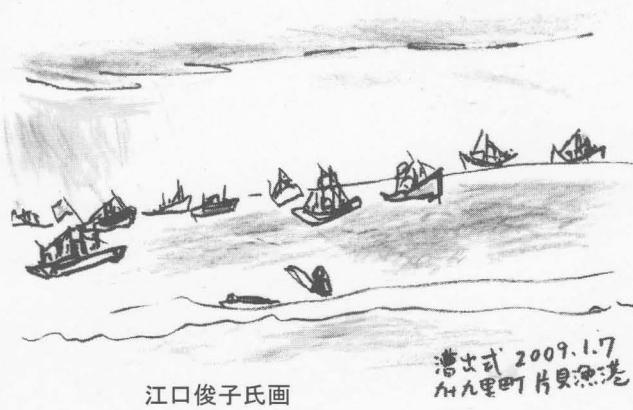
ラーメンが好きで、律義者で礼儀正しい川谷拓三も、今は故人となつてしまつた。

このように平成一桁時代は、各局のテレビの画面に伊能忠敬が登場し、第一次の忠敬ブームを巻き起こした。

(さくま
たつお・伊能忠敬研究家)



伊能忠敬に扮した川谷拓三と佐久間
(伊能忠敬旧宅中庭にて)



◇◇伝承の虚実◇◇

伊能忠敬にまつわる一つの石の物語

河 島 悅 子

伝承その一 「王丸の腰かけ石」

「糸島市怡土校区の王丸から川原への県道が川原川の清流と出あうところの道ばたに、草の茂みの中から二つの自然石がニヨキニヨキと頭を出している。一つの方は高さも胴回りも一メートル以上あろうか、もう一つのはやや小さい。

土地の人たちはこの石を「伊能忠敬の腰かけ石」という。その古い話によると、この石は今から百六十年前の文化九年（一八一二）に幕府の命をうけた伊能忠敬が糸島の各地を測量して廻ったとき、この石に腰をかけて

「この石の頂上は、はるか向こうの可也山（或いは火山の誤伝？）と同じ高さである」と言つたことが伝えられているからである。伊能忠敬の怡土

地方における足跡は正確なことは判らないが、この一行はその年八月、今宿（福岡市西区）から二班に別れ、一班は海岸ぞいに、また忠敬らの本陣組は街道ぞいに今宿から女原（徳永）周船寺へと足を運び、「周船寺川は渡し六間」などと記録している。

この忠敬ら一行が果して山奥の王丸まで来たかどうかそれもよく判らぬ。然し、何しろ幕府の命をうけた一行であり、各地とも前ぶれが行き、下へもおかぬもてなしであつたと思えるから、或いは信仰にも似た尊敬感が各地に伝わっていたであろうことはほぼ推察できる。

「この石の頂上が……」と忠敬が言つた伝承が残っているのも面白い現象である。

この石の頂上が海拔何メートルに当たつてゐるのか筆者も知らぬが、大体の地形図からみて、二百四十五十メートルぐらいではあるまい。それを可也山の三百六十五メートル、火山の二百四十六メートルと比較すると、可也山より火山を指して言つていいのではないかとも思われる。

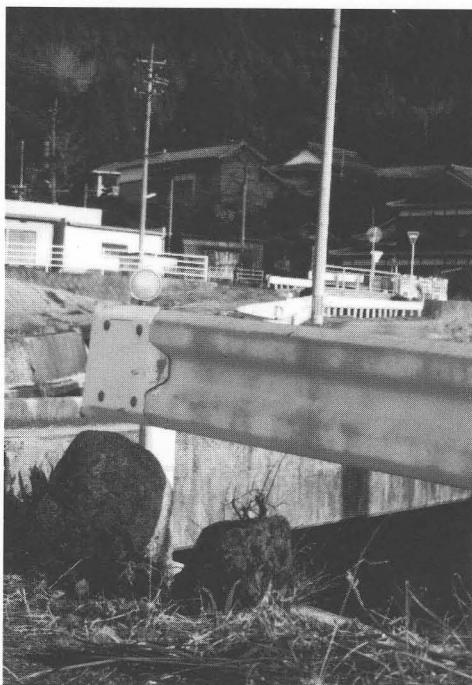
いずれにしろその頃の伊能忠敬に対する民衆の敬慕の感情が、しぜんそう言わせたのかも知れぬし、或いは本当にここまで足を伸ばして遙か向こうの火山と等高線であると測量したのかもしらぬ。ついでながら忠敬が志登村（現糸島市）で記録したことの中には「ここから左二丁十ばかりのところに高須山

〔八世紀、吉備真備が怡土城を築く〕がある。原田種直「太宰少弐大藏姓子孫」より世々居城す。『豊臣秀吉の文禄の役』朝鮮にて没す。絶家とか潤川は巾九間、川上は雷山へ二里半、川下は泉州で落合う、などという記録もある。」（全文ママ）

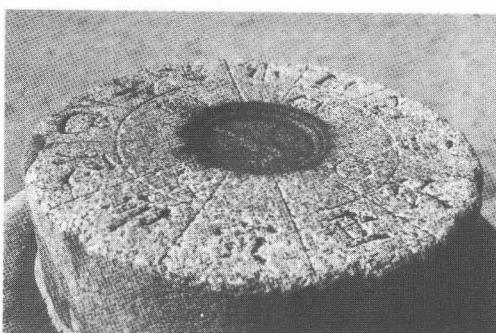


「王丸の腰かけ石」

『糸島伝説集』所載



現在の「腰掛石」



若松恵比須神社の方位石【写真：轟次雄氏】

四十年後の平成二十二年一月現地に行つた。腰掛石のそばを流れる小川にはガードレールが張られ、足もとは護岸工事と舗装がなされ、石は風化が進み半分くらいになつていていたが、地元の住民は伝承を堅く信じこの石の撤去には応じないという。

* * *

伝承その一「若松恵比須神社の方位石」
筑前領最北端の若松港は百年近く藩主の参勤交代に使われ、大坂蔵米の積み出し、西国巡回使の出入港に終始利用された。古くは連歌師の飯尾宗祇が『筑紫道記』で「若松に宿る」としるしている。

この地の恵比須神社境内に方位石が奉納され、文化九年と台座に刻まれている。

北九州市教育委員会の説明板には、文献が無く定かではないと書いてあるが、文化九年の文字が伊能測量隊を連想させるのか、専ら「伊能忠敬の方位石」と呼ばれている。文献が新発見されたのかと神社の権宜さんに伺うと「いえ文書はありません。でも伝承は古くからあります」とのこと、神社の建替えのとき古文書は廃棄されたのでしょうかと尋ねると、「いえ当社は近世初期の文書でも保存しております」とのこと、『測量日記』でもこの神社のことは全く触れていない。埋立てが始まると大正時代まで隣の日吉社とともに海岸そばに在り、沿岸測量時には境内横を通りたはずである。ちなみに石の方位は正確そのもので据えられているそうだ。

(かわしま えつこ・歴史街道を歩く会代表)

安藤由紀子さん

追悼

伊能陽子さん

佐久間達夫さん

渡辺一郎

三巨星逝く。伊能忠敬研究会の活動において、中心的な役割を果たされていた安藤由紀子さん、伊能陽子さん、佐久間達夫さんの三人を、僅か一ヶ月ばかりの間に相ついで失いました。何とも言ひようが無い悲劇であり、研究会にとつては大打撃であります。偶然にも、三名の計を早くに知り、お知らせする立場になってしまった御縁から、慎んで哀悼の言葉をささげます。

お三人の靈よ、安らかにお眠り下さい。想い返しますと、研究会創立メンバーである貴方がたの、過去十数年の伊能忠敬研究と事績顕彰活動は誠に偉大なものでした。

*

安藤さんの「坂部貞兵衛事績の顕彰」に始まつた多くの忠敬研究論文から和算の系譜に至るまでの諸発表、伊能陽子さんと共に著の『世田谷伊能家伝存 未公開文書目録』は、いずれも、後世に伝えるべき業績と考えております。その一方で、会報編集の裏方として、内外からの問い合わせへの応対、原稿の見直し、入力、なども精力的にこなして事務局を支えられました。

伊能陽子さんは、皆さんご承知のように、研究会のマドンナとして、各地のイベントに積極的に参加されました。明るいお人柄で、愛想が



1997.5 学習院大学での総会で

よく、誰とでもすぐ仲良しなれる特技をお持ちでした。陽子さんに会えるから出かけるという方も沢山いらっしゃったようです。その一方、忠敬史実にも造詣が深く、ご先祖とご主人を、ものすごく大切にしているらっしゃいました。まさに研究会の太陽のような存在でした。

佐久間達夫さんは佐原の小学校の教頭先生で退職後、伊能忠敬記念館の館長をされたとき、伊能忠敬の事績に感銘を受け、数学専攻だった方が、和文タイプを購入し、古文書を勉強して測量日記の解説を完成されました。研究会が発足後、測量日記の出版が実現しましたが、引き続き江戸日記・忠誡日記の解説や、基本的な諸研究を発表されました。仕事が速くて、私など分からることはいつも御教示を乞うておりました。ご逝去は私にとっては大痛手です。

また目下、測量日記のデータ化を始めていますので、その作業途次でもありました。

*

昨年、安藤さんが肺癌で大手術をしたと聞いていましたので、暮れも押し詰まってから、励まそうと思つて電話をしたところ御主人が出られました。「由紀子さん、大病をされたそうで・・・といいますと、「病気をした」という過去形ではなく、今、大病で病院にいっています」とのお返事でした。

ビックリ仰天したが、申し上げようもないでの、お大事にと電話を

きりましたが、御主人は「あきらめている」という悲痛なお話だった。伊能洋さんには伝えたが、何ともやりきれない日々が続いた。

そして一月一三日、陽子さんから電話。「私、お話できるようになつたけど、こんなガラガラ声になつちやつたのよ。それで・・・安藤さんが一月四日に亡くなつたんですつて・・・」「えー。長くはない」と聞いていたけど、急に?」「そうなんですか、それも息子が出した年賀状の返事でしらせてきたのよ」「私には知らせる、といつていたのに、独りで何んにも言わずに往つてしまふなんて・・・」あとの陽子さんが、今にも泣き出しそうな声だった。

後から聞くと、ホスピスに入つていたとのこと。安藤由紀子さんは、

誰にも知らせず、見守りも求めず、独り静かに人生を退場したらしい。

お譲さん育ちで、妥協しない安藤さんらしい往き方だった。だれしも衰えた最後の顔など、知友に見せたくないかも知れない。私にも見舞いを頑強に拒否している友人がいる。安藤さんの享年七五歳。

*

そして、一月二五日、陽子さんの息子さんから電話。「母が急死しました。研究会関係と報道関係への連絡をお願いしたい」とのこと。

急性心不全で、朝の食事の準備中に倒れられたという。

昨年から、舌癌の手術、リンパ線の摘出、放射線治療、と頑張つて闘病し、副作用も收まりつづつ矢先だった。重ねての痛恨事で残念で仕方がない。私との御縁は、フランス中図の調査をおこなつたとき、朝日新聞のパリ支局が送つた「ひと欄」の記事に始まる。これを見た陽子さんから電話があつて、うちに残つてゐる伊能家の資料のなかにわからない地図があるので、見て欲しいということだつた。この頃は、安藤さんと老後の楽しみにと、世田谷伊能家文書の整理を始めたところだつたらしい。



1995.11 佐原・ペイレ図展レセプションで

佐久間さんは十一月に入院したことを承知していたので、退院はしだろうと思って二月七日、少し用があつて連絡をしました。すると息子さんが出られて、実は父は二月五日に亡くなりました。明日通夜、明後日葬儀です、といわれる。何たることかと唖然としましたが奥様に御様子を伺おうと弔問の約束をする。

八日の午後に、伺つてお別れをし、状況を伺つた。前夜は食事を沢山召し上がって就寝され、五日の夜一〇時頃は異状は無かつたとのこと。六日の二時頃、虫が知らせたのか、奥様が様子を見にいつたら、息がなかつたといわれる。入院の原因だつた肺炎の方は回復していく、やはり急性な心不全だつた。享年八一歳。もう少しの間元気に活動し、ご教示をいただきましたがつたと思います。合掌

眺めると地図は測量下図や、伊能隊へ提出したと思われる村絵図だった。針穴の利用も、そのときお二人に、実物で説明したことを思い出す。フランス中図の佐原展が決まつたとき、ご両人と相談して芳賀啓さんを誘つて、伊能忠敬研究会の旗揚げをきめた。後のことは皆様ご承知のとおりで、老後の楽しみどころではない大展開となつた。

この研究会は女性主導で発展したといわれるが、そのとおりで、お二人を中心回つてきたようなものである。陽子さん享年七五歳、安藤さんと同年だが、何も人生の退場まで一緒でなくともよかつたのだと思ひます。

*

佐久間さんは十一月に入院したことを見抜いていたので、退院はしだろうと思って二月七日、少し用があつて連絡をしました。すると息子さんが出られて、実は父は二月五日に亡くなりました。明日通夜、明後日葬儀です、といわれる。何たることかと唖然としましたが奥様に御様子を伺おうと弔問の約束をする。

研究レポート『伊能忠敬』（九）

忠敬の見た風景（その三）

石谷春香

三日目 八月七日 晴れ

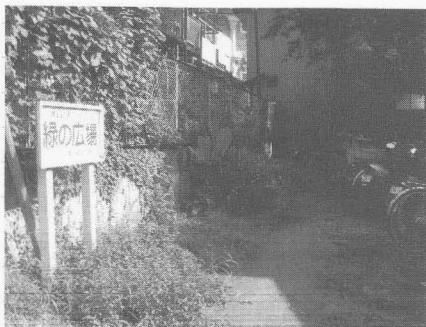
民宿で朝食を食べて出発です。

おみやげやさんの所は朝早いので
まだ人がいません。



ないしょの駐輪場に行きます。

自転車は無事です。
おせんべいやさんのおかげです。



地下に一度行って右に行きます。



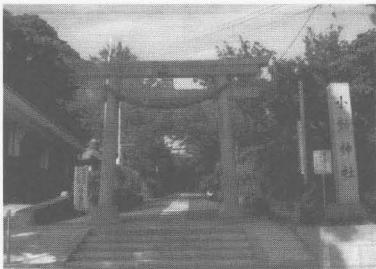
江の島大橋を渡ります。





腰越漁港と小動神社を通ります。

小動岬こゆるさきが見えます。



左に江ノ電の線路があります。

海はとてもきれいです。

江ノ電が通ります。

江ノ電は「かながわの未来遺産二〇〇」に選ばれています。

さらに進み後ろを見ると江の島が小さくなつていきます。





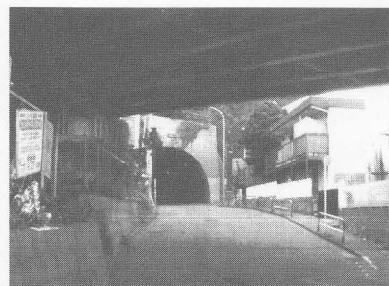
滑川をわたりります。
ここを左に行くと鎌倉です。

このあたりの道はとても走りやすい
です。



稻村ガ崎は「かなが
わの景勝五〇選」「か
ながわの未来遺産—
○○」に選ばれてい
ます。

以前ここでお弁と
うを食べたことがあ
りますが、とんびが
とても怖かったで
す。



ルールその二 無理をしない
です。
しかたがないので下の小坪海
岸トンネルを通ることにしま
した。

本当は上を走る飯島トンネル
を行きたいのです。

しかし、トンネルを見ると車が
とてもスピードを出して、しか
も自転車が通れそうもありません。



しばらく行くと道が終わって
しまいます。
しばらく行くと道が終わって
しまいます。
もう一度下がって上ります。
一度下に下がって上ります。

しばらく行くと道がとぎれて
します。

逗子マリーナのところを通ります。
遠回りしてさつきの道の近くまで行きます。
しかし車が多くて危ないようです。
どうしようと思つていると近くにいた人が
声をかけてきました。

「どこに行くの？」

逗子のほうに行きたいです」と言つて、
「トンネルはちょっと危ないから遠回り
したほうがいいかもね」
と言つのです。

さらに聞くとかなり遠回りになるようです。

困りました…

でもその人は、

「気をつけて行けば平気だけどね…おれもよく通るよ」

なんだ… それならとりあえず行つてみることにしました。

しかし！

いざ行つてみるとやはり危ないようです。

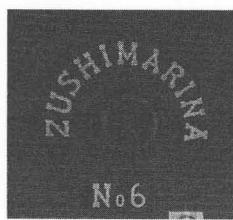
ルールその一 無理をしない

でも

ルールその二 あきらめない

じーしょ？

考えたのですが行つてみるとしました。



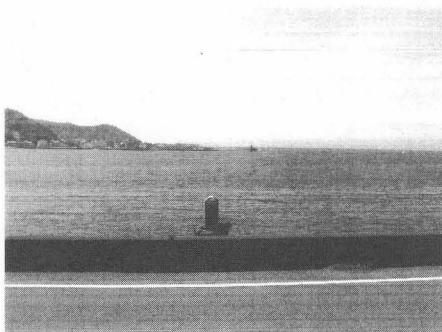
伊勢山トンネルです。
歩道みたいのがあります
ですが、幅がせまいです。

歩道みたいのがあります
ですが、幅がせまいです。

車がすごいので自転車を
押していくことにします。

とても長いトンネルです。
事故にならないように
ゆっくり進みます。

そしてようやく出口に
たどり着きました。



逗子海水浴場を過ぎて行きます。

よかつたです。
またスタートです。

少し行くと海の中に碑が立つ
ています。

不如帰碑です。
ほどときす

明治時代の徳富蘆花の小説
「不如帰」の文学碑です。

葉山マリーナを過ぎて行きます。

道が狭くなります。
森戸神社を通ります。

森戸は「かながわの景勝五〇選」に選ばれています。
それから葉山灯台は石原裕次郎灯台とも呼ばれています。
県立近代美術館を通ります。
以前にきたことがあります。

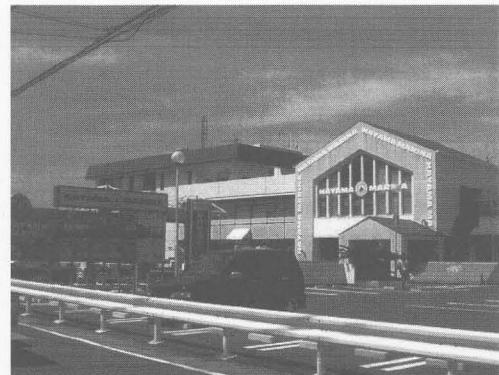
葉山しおさい公園を通ります。

葉山御用邸を通ります。

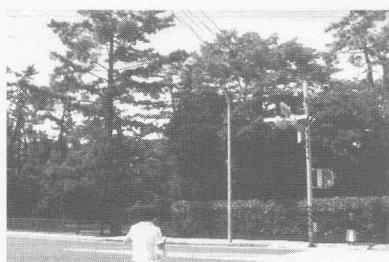
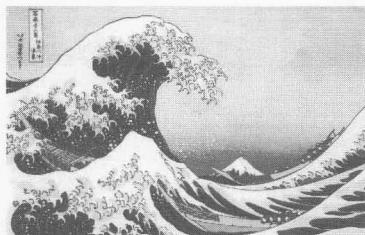
ここは天皇の別荘です。このあたりは「かながわのまちなみ
〇〇選」に選ばれています。

城ヶ島まで一八kmの標識があります。長者ヶ崎を通ります。
長者ヶ崎は「かながわの景勝五〇選」に選ばれています。
長者ヶ崎は相模湾に突き出た岬です。

横須賀市の標識があります。



すると景色がとてもきれ
いになります。
遠くに赤い鳥居と灯台と
富士山がみえます。



横須賀市 西

細い歩道を進みます。
立石を見ます。



立石は海の中にある大きな岩です。

「かながわの景勝五〇選」と「かながわ未来遺産一〇〇選」に選ばれています。
この立石は高さが一二mにもなるそうです。

城ヶ島まで一二kmの標識があります。

ファミリーマートでアイスをたべます。
すかいらーくでお昼です。

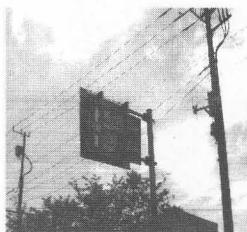
実は頭がなんだか痛くなつていきました。
休けいです。

・・・

一時間ぐらい休みました。

もうだいじょうぶです。

スタートです。



FamilyMart

油屋秋谷店
神奈川県横須賀市秋谷2-7-2

電話: 046-866-8100

領收証

2007年8月1日(火)10:51

天然水・牛アルブ2.2L	¥118
ザ・氷1.1KG	¥212
アイスホッカス巨峰	¥13
ジャイアントコーン	¥13
小	¥2.6
現 計	¥626
(内消費税)	¥9

Edy はい
使って当てよう!
キャッシュレス決済

レジ 1-8016 売り 006



17 三浦市

坂を上ります。

ずーっと坂です。
きついです。



坂をのぼると京急久里浜線三崎口駅に着きます。
近くでスイカを売っています。



三浦市の標識があります。

田んぼや畑が増えてきます。
道の左には陸上自衛隊武山駐屯地があります。

畑ではきたないスイカが取り残されています。



アミニマーマートでアイスを食べます。



橋を渡ります。

城ヶ島大橋の長さは五七五mもあります。



そして城ヶ島に渡ります。

下りの道です。

城ヶ島は「かながわの景勝五〇選」と「かながわ未来遺産一〇〇」に選ばれています。

城ヶ島の一番奥まで進みます。
おみやげやさんがあります。

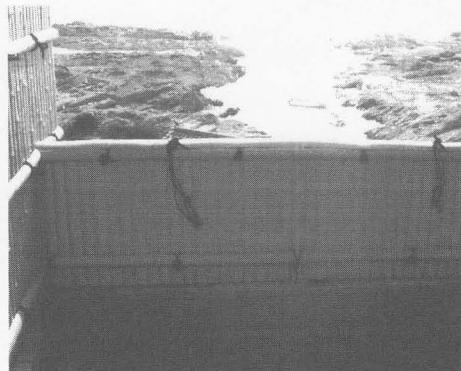
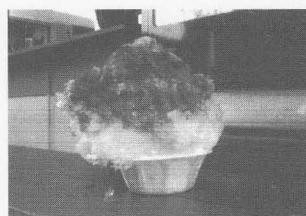
進みます。
城ヶ島の入り口です。
三浦陸橋を渡ります。
そしていよいよ城ヶ島大橋です。
料金所を通ります。
自転車は無料です。



そしてとうとう泊るとこになりました。
民宿 港屋です。

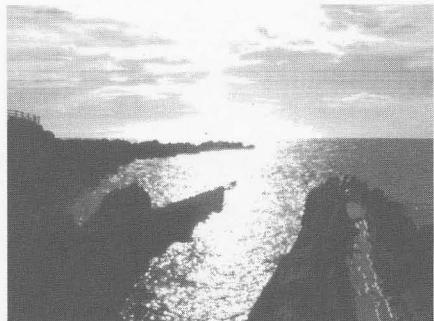


疲れました。
メーターをよく見ると一〇〇・一一〇kmになつてます。
よく走りました。
部屋からは海がよく見えます。



お風呂は露天風呂になつて
海がみえます。
すぐに入りました。

おみやげやさんのお兄さんが「カキ氷どう? 大盛りにするよ!」というので三〇〇円だったら本当に大盛りでした。



それから海を散歩しました。
とてもきれいです。

カニをとつてカキ氷のカップにいれ
ました。
すぐに逃がしました。



夕食はとてもたくさんでした。
おさしみもとてもおいしいです。
いろいろ出ましたが全部食べきれ
ませんでした。



城ヶ島の夕日はとてもきれいです。

(いしや はるか・文教大学付属高等学校一年)

つづく



3日目 城ヶ島の夕暮れです 遠くに富士山が見えます

榎本武揚の時代と語学

伊 藤 栄 子

武揚個人の語学力については、兼々非常に関心があった。辞書も各人が手作りで学んでいた時代である。残された書物により彼らの生活と時代の推移を見ながら考えてみたい。

幕府がオランダへ海軍留学生を派遣したのは、軍艦製造注文に関して始まつた事で、其の頃幕府の中では海軍拡張の急務が切実に考えられていた。最初米国のハリスとの談合で今度は是非アメリカで蒸気軍艦を発注して貰いたいとの意向があり、幕府としては併せて海軍についての学術を研究させたいと依頼し、ハリスが之を引受けたのが始まりである。丁度其の頃アメリカでは南北戦争が勃発し本国の状況は不穏となり、文久二年正月日本からの依頼をアメリカ側から断つてきた。そこで幕府は先ず軍艦一隻をオランダへ注文することとなつた。これによつて建造されたのが開陽丸である。同時にアメリカへ派遣される筈の留学生も其のまま行く先をオランダへと変更したのである。英語から蘭語への転換は留学生にとっては却つて身近かな語学であった。

武揚は昌平黌在学中から江川太郎左衛門の屋敷でオランダ語を習つていた。土佐から中浜万次郎が呼び出され江川屋敷に住むようになり又英語を学ぶ機会にも恵まれた。ただ長い期間ではなかつたらしい。

はじめ江戸でオランダ行きの命を受けたのは左の七人の士分である。内田恒次郎、榎本釜次郎、沢太郎左衛門、赤松大三郎、田口俊平、これは海軍諸技術研究が目的であり、津田真一郎、西周助この二人は蕃書調所教授手伝並で、あと長崎から医師の伊東玄伯、林研海が加わつた。それに六人の職方、古川庄八、中島兼吉、大野弥三郎、上田寅吉、

山下岩吉、大川喜太郎と前出の九人、計十五人のオランダ行きが決まつた。出立前に在府の士分一同は軍艦操練所に召し出され、軍艦奉行井上信濃守から洋行についての注意があり、数ヶ条の誓書とこれに血判を押したものである。主な項目として、「如何なる場合にも日本の秘密を洩らさざる事」「キリシタンに肩を入れまじき事」「本朝の風俗を改めまじき事」等があつた。この事は留学生達が帰国する迄彼等を拘束する事となる。

鎖国日本の外国語事情はどういえば、文化五年（一八〇八）八月、イギリスの戦艦フエートン号が長崎港に不法侵入した。当時イギリスとオランダは敵対関係にあつたから、もしオランダ船が入港していたなら沈めようとしたのである。この時長崎奉行に宛てたフエートン号艦長の英文書を読める者がなく、イギリスの敵であるオランダ商館長に手紙を渡して頼む始末であつた。そうした事から幕府は翌六年十月、長崎のオランダ通詞らに英語、ロシア語の兼習を命じた。これが日本の英語学習の最初であつた。しかも学習は外国人といえばオランダ商館の館員達しかいないので、長崎通詞たちはオランダ訛りの英語をずっと学んで來たのである。それから四十年後、嘉永六年（一八五三）ペリーがアメリカ大統領の親書を持って浦賀に来港した時、幕府は英文の親書を先ずオランダ語と中国語に訳し更に日本語に訳して諸大臣に意見を求めた。これでは英語の真意は伝わりにくい。しかしこれが当時の実情であつた。

折しもアメリカの漁船に助けられ、アメリカで教育を受け帰国して中浜万次郎が土佐から呼び出され、江川太郎左衛門の手付きとしてアメリカとの交渉やその他の対策に協力する筈であつた。だがここで水戸の烈公（斎昭）から横槍が入る。徳川斎昭といえば攘夷の急先鋒であつたから、時の老中阿部正弘も御三家には逆えず、万次郎の

語学力も表向きに役立つのはもう少し先になる。こうした情況であつても日本の開国への道は少しづつ進んでいった。間もなく日米通商条約を締結するため安政七年正月十三日（一八六〇）咸臨丸が品川を出港しアメリカへ向かう事となつた。万次郎は通弁主務として乗船した。この航海は海の荒れた日が多かつたが、航海の合間に日本人への英語教育として万次郎が勝海舟や福沢諭吉などにモーサルトの「きらきら星」のメロディーでABCを教えたというから面白い。いかつい面々が大真面目で歌つた様子を思い浮かべるだけで笑つてしまふ。当時、アメリカへ行く人々の英語のレベルはこの位であつた事が分かる。

咸臨丸がアメリカから無事帰国してから一年四ヶ月が過ぎた。オランダへ行く留学生達は文久二年九月（一八六二）長崎を出帆した。途中暴風で船が難破したり、いろいろ手間どりロッテルダムに着いたのは翌年の四月であつた。当時はスエズ運河もまだ開通していない。そのため船はアフリカの西海岸を廻りセント・ヘレナ島に寄港してからヨーロッパへ向つた。この島はナポレオンの終焉の地で、彼ら留学生達にもナポレオンの生涯の事はよく知られていた。上陸した一行はナポレオンの墓に参るために案内を探したが、この英領になつた島でも彼らの英語は通じなかつた。やつとオランダ語のできる人を見つけて墓参をしナポレオンの旧居も訪れ、島内を見学したといふ。

間もなく文久三年（一八六三）四月オランダに着いた留学生らは、ロッテルダムからは汽車でライデンへ向つた。日本人の一行は汽車を見るのも乗るのも初めてで、只々驚嘆するしかなかつた。案内は日本学博士のホフマン氏であつた。この人は日本及び中国に関する碩学で、東洋へは行つた事もないのに、書物により独学で日本語を理解し文字も書ける篤学者であり、「日本文典」「大学」等の著書もある。ライデン大学（一五七五年創立）はオランダ最古の大学で特に医学

と自然科学の分野で優れた業績を残している。現在はシーボルトが日本から持ち帰つた多くの資料も保管されている。この大学について以前早稲田大学名譽教授の杉本つとむ先生から伺つた話がある。先生は在職中二年間ここに留学された事があつた。日本からの来客が部屋に入るや教授も学生も一齊に起立して敬意を表してくれた。残念ながら今の我が日本の大学にこうした風習があるだろうか。先生の嘆かれた事を思い出した。折り目正しさは一日にして成るものではない。留学生一行は長崎伝習所で教えを受けたポンペ医師の世話により、又同じく教授のカツテンディーケは時の海軍大臣となつていて、何か



幕末期オランダ留学生の面々（写真提供/沼津市明治史料館）
榎本らのオランダ留学時に撮影されたもの。榎本（後列中央）、西周（前列左端）、赤松則良（前列左より二番目）らの顔が見える

と便宜を計つてくれ幸いであった。彼らの蘭語力は人によつて大分差があつたらしい。そこで日本人が一緒に住む事は、知らず／＼日本語を用いるから不得策だという事で、分散して住む事になつた。榎本はスコロイトル方、沢は小銃火薬販売業のペプト方、赤松は時計師ベエル方の二階に下宿することになつた。こうして夫々個人の家に住む事になつた。いっぽう西と津田は専攻が文科系でありライデンに残つた。

このあとハーグへ移り修業先により、隨時住居を変える事にもなる。住居は定まつたが服装には困つた。彼らが江戸を出発した時に幕府に差し出した誓詞の一項を守る為め、衣服は純日本式で押し通して來たけれど、外出する度に日本人を見ようと民衆が群がり、二階や三階から見物する者もいて、市街へ出れば人だかりに悩まされた。何しろ黒紋付きラシャの羽織に裁付袴に両刀をさし、チヨンまげ頭で帽子もない。裁付袴というのは、今テレビで見る角力の土俵を思い起すと早い。

土俵を簞で掃きならしている人の袴というよりモンペのような衣服がこれに近く労働し易い服装である。こうした事があり、海軍卿のカツテンディーケからの忠告もあって、一同兜をぬいで洋服を着る事になつた。但し頭髪だけは、何時日本へ呼び戻されるか分らないので、洋風の前髪で後ろの方には鬚をつけたまま帽子でこれを隠したといふ。

彼らが困惑したのは言葉の壁だけではなかつた。

日本人留学生が外国で専門の学問を学ぶには、何よりも言葉の壁を乗り越えるのが急務であつた。オランダ留学生の夫々の語学力について、先ず赤松は十五才の春から深川冬木町の坪井塾で蘭語を習い始めた。その頃は土分で蘭学を学ぶ者はなく、大部分は医者を志ざす者であつたという。安政三年（一八五六年）幕府は江戸に蕃書調所を置き、江戸在住の御家人から洋学の心得のある者を探していた。赤松はその

選に入り句読教授出役となる。のち勝海舟の世話を咸臨丸に乗り勝と共に渡米した。
くどう

蕃所調所とは以前よりあつた天文方役所の中に、文化八年（一八一）蛮書和解御用方として翻訳掛りを置く事になつた。長崎から和蘭通詞の馬場佐十郎が召し寄せられ、蘭学者大槻玄沢と共にその掛りとなつた。その後御用方は天文方役所から独立して安政二年（一八五五）洋学所となり翌年蕃書調所となる。仕事の第一は外交文書等の国に有用な洋書の翻訳と第二は蘭学の教授であつた。ここで句読教授出役を勤めていた赤松は大方の蘭語の用には差支えはないが、發音が正しくないから匡正練習するようにとホフマンやポンペに言われていた。赤松は一同の中では日本での蘭語學習が長く力は群を抜いていた。この彼も一度フランス語にとり組んでみたが途中で断念している。

内田は十八、九才の頃、昌平黌の試間に甲科及第した秀才であつた。内田も赤松も長崎で海軍伝習生となり、オランダ人教師から航海術、測量、数学、語学等を学んだが内田は物覚えが早く國漢の素養もあつたから語学修得のスピードも早かつた。かれは留学生仲間では同じ士分でも一番身分が高く、一同の取締役を勤めていたが少々高慢なのが玉にキズであつた。

榎本や沢の語学力は赤松や内田に比べても遜色がないほど高かつたといわれる。榎本は在蘭中、極力語学に力を入れ蘭語の外英語、仏語まで学び、しかも相当な運用力があつたと評価されている。武揚がこの国で身につけた語学力を發揮するのは、これ以後の外交官生活であり、維新直後の日本にとって貴重な存在となつた。

田口は留学当時すでに五十才近く、最年長で他の連中より修学は振わなかつた。加えて生来足が悪く引き籠りがちであり、彼は帰国後間もなく死去した。

以上の五名と職方六名が何といつても日本海軍設立の為め技術面での研究の本隊であり、あと四人は特志参加であった。西と津田は共に蕃所調所教授手伝並であり、語学力は何とか文意を解するのに不都合はなく、歐文書簡の翻訳と和訳を引受けていた。蘭語のみならず、英、仏、独文も理解していたが、会話は不得手であったという。この二人は在蘭中フリーメイソンの会員となつた。おそらく日本人としてこの組織に入会したのは二人が最初であろう。西、津田の両名は他の留学生より早く慶応元年（一八六五）業を終了して帰国し、共に開成所の（大学南校）教授となつた。

医学生の伊東、林らは二人とも奥医師の嗣子であり、名門の出で長崎の養生所ではポンペから既に指導を受けていて名をなしていたが、明治日本の医学は大学東校：東大医学部を中心とするドイツ系医学となつていて、オランダ医学からは次第に離脱していく。従つて二人が学問的に明治の医学に貢献する事はなかつた。伊東玄伯は明治三年、再度ユトレヒト大学に学び帰国後大学東校の中博士となる。その後時が移りあれから百年以上たつた現在の医学部ではドイツ語は必須科目ではない。替わつて英語が主流となつてゐる。まさに語学も時代と共に変ってきた。

職方の蘭語については、殆ど書かれた本はないが、元来技術面で選ばれた者であり、語学の方は心もとなかつたであろう。それでも渡蘭の船中で多少は学び、ライデンでは修業に先き立ちホフマンやその弟子たち及びファン・ディクからオランダ語を学んでいた。この中大川はアムステルダムで客死したので、帰国したのは五名になつた。幕府の今迄の慣例からすれば、留学という場に士分以下の者が出ては考えられない事であり、時勢がようやく身分の枠を抜け出しつつあつた。これは特に幕府当局が海軍の建設に当たり、外国の造船技術を必要と

悟つたからにほかならない。こうした使命を担つて渡蘭した職方の人々も西洋の技術を身につけて帰朝し、こののち明治日本の新しい文明の建設に少なからず貢献をしたのである。

「オランダでの学修科目と講師」

〔受講者〕

内田、榎本、沢、田口、赤松

（ディノー海軍大尉）

榎本

蒸気機関学（ホイヘンス海軍大佐）

榎本

大砲・小銃・火薬製造法

沢

造船学（ティーデマンとトロク）

赤松

理学・化学・人身窮理学

伊東、林、榎本、赤松

（ポンペ医師）

化学（フレデリックス及び

スチューテルヘイム）

林、伊東、榎本

この課目の外、オランダ語のレッスンは當時あつた。

これはほんの一例であるが榎本は特に何講座も受けている。彼は向学心が旺盛で、講義は夫々別のオランダ人教師であるから、同じ蘭語でも語学の勉強にもなる。講義は小人数なので日本人の下宿先又は講師の家で行われた。日課を見てみると

八日 晴。午前中内田方で物理学講義、午後はオランダ語と代数のテストが行われた。

九日 晴。午前中平常授業。午後幾何の講義。

十日 晴。午前中ポンペの物理学の講義。午後はオランダ語の授業。

このように赤松の「留学日記」に細々と綴られている。

元治元年（一八六四年）武揚がオランダに来てから二年めの冬、デンマークとドイツ、オーストリーの同盟軍の間で戦端が開かれていた。榎本はオランダの青年士官一人と赤松則良を誘つて観戦武官として現地に出向した。この事は欧州の実戦を最初に目撃した日本人として、良い経験となつた。赤松は願つても得られない機会であるからと二つ返事で参加したという。この時の服装は同行のオランダ士官の助言で洋服だとインド人と間違えられるからというので、例の日本服を着て出立した。ドイツのカール親王の本營を訪れた時などは、幕僚のメント内で起臥していた。ここで幕僚の士官達は二人を取り巻き、よい服装だと褒め、又佩刀の切れ味には感嘆したという。当時陣中の食物は専ら罐詰の肉が用いられていた。尤も罐詰は長崎からオランダへ向う船中で食べた事はあった。日本では保存食といえば干飯の類の時代であつたから、ここでも文化の違いを思い知らされたことであろう。

然しどうしても武揚の心に留つたのは野戦電信機であり、赤松の注目は銃砲であった。武揚は後に帰国の時電信機を二機持ち帰つてゐる。榎本と赤松は三週間ほどでハーフに帰つた。彼らが観戦のため廻つたのはドイツとオーストリーの軍隊であつたから、二人は怪しげなドイツ語で談話をしていう。もともとオランダ語はドイツ語に近いので、案外と容易で二人のドイツ語も意を通ずるには足りたと赤松は語つてゐる。当時ドイツにはクルップという兵器製造及び製鋼を業とした一族がいた。武揚と赤松はクルップ社にも何度か訪れてゐる。

又在蘭中武揚と赤松は一ヶ月程英國をも旅行した。この時はカツテンディイケ等から紹介状を貰つてロンドンへ赴いた。この頃になると二人の英語も日用の事足りるだけには通じたようである。旅をする事は会話の力を試すよい機会となる。彼らはシェツフィールドやリバプールの造船所、機械工場、鉱山などを見学した。

ハーフでの生活では日本で学んだ蘭語では発音の練習が必要で、これには上流階級の家族と交際するのが良いというので、ポンペの紹介により、国会議員、市会議員、大学教授等の家へ招かれて、留学生らはしばしば会話を交わす機会に恵まれた。又当時は日本として徳川幕府の時代、公使館や領事館は設置されておらず、たまに日本から使節がヨーロッパへ来ると、留学生は何かと頼りにされて呼び出され、外国に慣れない彼らの世話をしてきた。

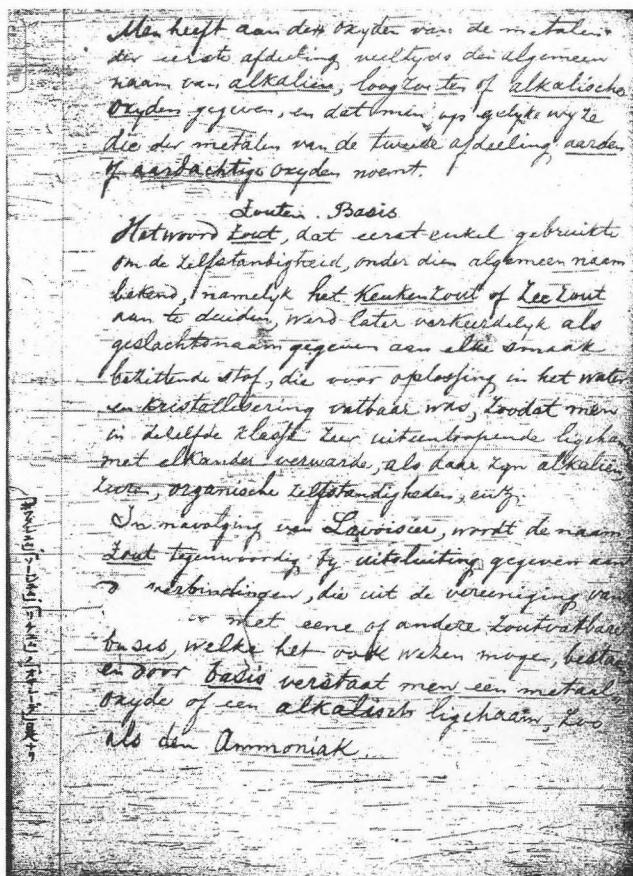
慶応二年（一八六六年）四月十日（陰暦三月六日）開陽丸には内田、榎本、沢、田口の四名、職方五名計九名の日本人とオランダの海軍大尉ヂノウという熟練士官が艦長となり、外に士官一人、医師一人、下士十四人、其の他蘭人、英人、印度人等の火夫、水夫合わせて百五十人が乗組み、瓦解寸前の幕府のもとへ向け出帆した。医学生の伊東、林、と赤松はあと二年の留学延長が認められてオランダに残つた。今まで留学生の生活について記したもの、彼らの語学がどの程度のものか資料がなかつた。しかし「幕末オランダ留学生の研究」の著者宮永氏によつて漸く明らかになつた。氏はこの本を書くに当たりライデンの古文書館まで行つて調査して來られたのである。書中に何通かの手紙が載せられていて興味深い。榎本が帰国の船中から出した数通の手紙が残つてゐるというが、帰国した直後の一通を紹介する。

一八六七年五月六日

敬愛する友へ

（恩師ステュルヘイムに宛てたもの）

本状を貴殿に呈する所以は、私たちが（東インドのアンボイナ）を出帆以来十九日間の航海をおえて、五月二十九日の午前十時、艦及び乗組員これまでと同じように上々の状態で、横浜港に入った事をお知らせする為です。五月二十九日、私は江戸にある我が家に帰りまし



武揚がオランダ語で書いた「石鹼の製造法」

た。ああ、やれやれ！母や家族が健やかなを見た時の嬉しさといったら。その時家族一同の喜びといつたら、いかばかりかお判り頂ける

と思います。大勢の訪問客が押しかけ、かなり煩わしい思いをしました。しかし、江戸のわが家に戻るとすぐ、友人の沢と共に開陽丸を受け取るための主席委員に任命されました。だから今、私たちは使命を

果さんものと、健やとなるまま横浜に来ております。従つて江戸にいたのはわずか五日間だけで、まだ一日も休養を取つておらず。

すぐに手紙を書くことができなかつた理由もここにあります。次の機会に更に委しくお知らせできればと思つております。次に御家族の皆様に心からの御挨拶をお送りします。どうか御伝え下さい。

貴下の忠実なる友にして弟子

榎本釜次郎

追伸　お序の節に、ムトン氏とフレデリックス氏にもよろしく御伝え下さい。暇がないために、フレデリックス氏には、まだ手紙を出しておりません。

（武揚がオランダ語で書いた原文を宮永孝氏が翻訳されたものです）

参考までに武揚が書いたオランダ語の「石鹼の製造法」をここに掲げます。この一紙は武揚の曾孫、榎本隆充氏から御提供頂きました。

【参考文献】

『榎本武揚』

加茂儀一著　中央公論社

『幕末オランダ留学生の研究』

宮永孝著　日本経済評論社

『ジョン万次郎のすべて』

永国淳哉編　新人物往来社

『赤松則良半生談』

赤松範一編注　平凡社

（いとう　えいこ・古文書研究家）

柏木家に残された忠敬資料（五）

柏木 隆雄

ので同家にある忠敬の遺書・遺品の中にも、江戸時代のわが家に関係した記録が保存されている。柏木家は、一七三七年（元文二年）に出生した柏木乙右衛門・幸七によつて始まる。幸七は、柏木久兵衛の実子で、分家して乙右衛門を名乗り、寺宿に一家を構えたものと思っていた。

佐久間達夫さんが亡くなられた。二〇一〇年の年が明けて安藤由紀子さん、伊能陽子さんに続いての訃報である。私の心中にも大きな空洞ができてしまった。痛哭の極みである。佐久間さんは柏木家にとつて大恩人、伊能忠敬と柏木家の関係を、多くの資料を掘り起し、丹念な調査研究によつて解明してくださった。佐久間さんの編著になる『伊能三郎右衛門家の裏方として尽した柏木久兵衛』におおよそのことが掲載されている。

「墓のうらに廻る」これは自由律の俳人、尾崎放哉の句であるが、まさにこの通り、佐久間さんは、佐原の観福寺にある伊能家、柏木家の全ての墓石の表裏を一文字も残さず記録し血脉の流れを明らかにしてくださつた。

佐久間さんが書かれた「墓誌」と称する一文が手元にある。

墓誌

柏木家の当主・政雄が永眠した機会に、きょうだい一同が先祖の靈を弔い、子孫の繁栄を願うため、柏木家の家系図を作成しようとすることになつた。

幸いにも、宗家・柏木久兵衛（現当主俊一氏）家の墓石や、菩提寺の過去帳には、わが家の先祖のことが記されていた。また、柏木家は、実測による日本地図を初めて作製した伊能忠敬と親族である

所が、平成十四年十二月十日に、市川市に住んでいる隆雄が、伊能家の後裔・伊能陽子女、それに伊能忠敬研究会の会員三名（渡辺一郎、伊藤栄子、佐久間達夫）とともに、柏木久兵衛家から佐倉の国立歴史民俗博物館に寄託された「伊能家関係文書」五十九点の調査を行つたとき、「伊能三郎右衛門家・柏木久兵衛家の先祖書があつた。

「先祖書」には、次のような記述があつた。

八代目（七代目が正しい）発心院即到無覺居士、寛保三亥年六月十六日、柏木久兵衛先祖、但シ三男、椎木、新町工分地、「性寿院満空法伝沙弥、宝曆四戌年十月二十六日、無覺三男、久兵衛先祖、一代」

このことから伊能三郎右衛門家の「家牒」と、柏木久兵衛家の「先祖書」とを照合した結果、ここに記述されている「伊能昌雄の三男・柏木久兵衛は、柏木乙右衛門の始祖である「幸七」ではないか。と、推測された。（佐久間達夫編著『伊能三郎右衛門家の裏方として尽した柏木久兵衛』。）

幸七の長男が、二代目乙右衛門（逢源院）で、その子に音右衛門（僧名周道房）と、音五郎（乙五郎・智勝院）がいた。音右衛門、出家して観福寺の僧となり、「田宿」に住んだ。弟の音五郎も田宿に分家した。この音五郎が、柏木幹雄家の祖である。その理由は、柏木久兵衛家の墓石や過去帳に、

「秋覚涼円童子、文政二年七月八日没、行年十一歳、乙五郎の子、音右衛門の孫」

と、記してあるからである。又、伊能家所蔵の「為知名前控・名前を知るための控」にも、「新町 柏木久兵衛、田宿 柏木乙右衛門・柏木乙五郎」と、記述されている。

なお、「伊能忠敬先生日記」や忠敬の孫の「忠誨日記」にも、柏木久兵衛・柏木幸七・柏木乙右衛門・柏木音右衛門が、たびたび江戸や佐原の伊能宅を訪問したり、裏方として伊能家のために尽くした様子が記述されている。



『伊能忠敬測量日記』
佐久間達夫氏校訂

歴史民俗博物館への寄託

文中、歴博の「伊能家関係文書」に触れているが、柏木家から歴博への寄託の際には、佐久間さんのご尽力と、歴博の山本光正教授のご指導に依るところが大きい。お陰で、今日まで無事に保管されており、有難いことである。

寄託当時、柏木家には、伊能三郎右衛門家五代景知・六代景利・七代昌雄・八代景慶・九代長由の位牌が残されていた。これらは平成五年六月十六日に、佐久間さんが東京世田谷の伊能家にお返しに持参した。

九代長由が亡くなり、そのあと、後見役の七代昌雄が死んでから、当主不在の期間が長かつた。筆頭番頭だった柏木久兵衛が、その間、伊能家の後見、支配をしていたと思われる。三郎右衛門家五代に亘つての位牌が柏木家に残されていた事実に結びつくことである。

忠敬・景敬が死去してからは、柏木家の裏方としての尽力は今まで以上に顕著となつた。(『伊能忠敬日記』) 柏木久兵衛四代当主と柏木乙右衛門幸七家二代の乙右衛門、三代音右衛門は、忠誨が、忠敬の功績により幕府から拝領した江戸箔屋町の屋敷の管理、それに伯母の妙薫(忠敬長女)の死後における佐原の領主や天文方への交渉、伊能家文庫蔵の管理、祝儀、葬儀など他家との交際で献身的に協力している。

『忠誨日記』の解説

佐久間達夫さんの伊能忠敬への傾倒と直向きな研究は、大著『伊能忠敬測量日記』全解読書の上梓となつて実を結んだ。ほかにも、『江戸日記』『忠誨日記』の解説文は、解説入りでその全文が本誌にも掲載された。

『測量日記』を読み進むと、改めて忠敬の成し遂げた仕事の凄さを感じる。そして日記の全文を読み易く解説してくださった佐久間さんのご努力に一層の敬意を抱く。

伊能忠敬に関する諸々の著述の原点となつていているのが『忠敬日記』、それは言いかえれば『佐久間日記』でもある。筆耕に当り、多くの人が恩恵に浴しているのである。

佐原に在つて孤高な研究を続けられた佐久間さんの功績は計り知れない。残された研究資料の権利を保護し、またそれを活用して、伊能忠敬研究会は一層の充実を図りたい。

今回は予定を変更し、佐久間さんへの追悼の寄稿といたしました。
(了)

(かしわぎ たかお・税理士・作詞家)

【参考資料】

『伊能三郎右衛門家の裏方として尽くした柏木久兵衛』

佐久間達夫編著



佐久間氏が館長を務めていた
旧伊能忠敬記念館



『伊能忠敬測量日記』清書本
伊能忠敬記念館蔵

名著『伊能忠敬』——その時代と人脈（三）

前田幸子

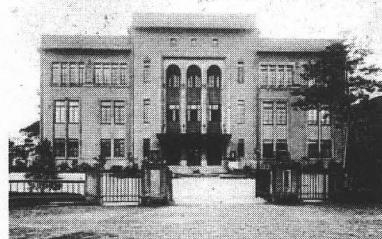
帝国学士院「伊能忠敬」を刊行した日本学術の殿堂

長岡半太郎による「伊能忠敬の事績調査」の提議に賛同し、これを推進したのが帝国学士院である。同院はこの調査の結果を帝国学士院版『伊能忠敬』として刊行し、また収集した資料を保管した。帝国学士院（一九〇六—一九四七）は学術上功績顕著な研究者に対する顕彰等の事業を通じ、日本の学術の発展を図る目的で設置された機関である。明治三九年（一九〇六年）に設置され、昭和二二年（一九四七）に「日本学士院」となるまで四二年間にわたり日本学術の最高権威として存在した。

長岡半太郎が「伊能忠敬の事績調査」を提案したのは明治四一年（一九〇八）六月一二日の第二回総会においてであった。この事業の由来と経過は、同書にかかげた長岡半太郎の序文に詳述しているが、文体が古く長文でもあるので、日本

本学士院発行『学士院ニュースレター』「本院所蔵資料の紹介」欄の「伊能忠敬事績研究のはじまり」という簡潔でわかりやすい記述をここに引用してみる。

「本院の伊能忠敬の事績調査は、明治四年六月、長岡半太郎会員が、第二回総会において提議したことに端を発します。



伊能忠敬の事績は死後百年余りを経た当時、断片的に資料が残っていました。長岡半太郎会員が担当委員となり、大谷亮吉氏に委嘱してこの事業に当たらせました。大谷氏は伊能家などに残る測量日誌等の資料、道具、機器等も細部まで調査し、大正六年に『伊能忠敬』（長岡半太郎監修、大谷亮吉編著、帝国学士院蔵版）を発行しました。この際、収集した資料が、今回紹介する伊能忠敬関係資料となつております。」（※編集部注 死後百年とあるのは死後九〇年が適当である）

ここで「伊能忠敬の事績調査」は、当時の帝国学士院の事業としてどのような位置にあるものだったのかを確認しておきたい。『日本学士院八十年史』によると同院の研究調査事業の実績は次の通りである。

(一) まず最初のものとしては、明治三九年の第二回総会において菊池大麓が提唱して行つた和算史の編纂がある。これは史料散逸の虞があり、和算史の編纂が急務であることを理由に、閔孝和およびその他和算家の史料を収集して取りまとめたものである。この事業の際も三井合名会社から寄付を受けている。この事業の次に行つたのが、(二) 長岡半太郎の提唱による伊能忠敬の事績調査および『伊能忠敬』の刊行である。すなわち本書の刊行は帝国学士院として一番目の研究調査事業であった。これ以降の事業としては、次のものがある。

(三) 坪井九馬提案による『燃黎室記述』（朝鮮李朝）の定本作成、(四) 穂積陳重提議によるローマ法に関する文献の翻訳・出版（五）

皇室からの御沙汰による帝室制度の歴史的研究

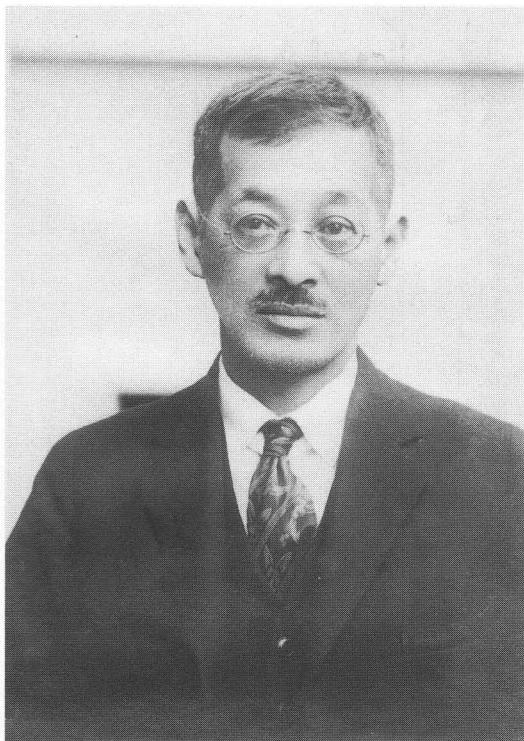
こうしてみると『伊能忠敬』の刊行は、日本における学術の最高機関の事業として国家的レベルで実施されたものであつたといえよう。

大谷亮吉—伊能忠敬の業績と真価を結実させた『伊能忠敬』の著者

長岡半太郎が主導し、三井財閥から二千円の寄付を受け、帝国学士院から『伊能忠敬』が刊行されることになった。

執筆者は長岡半太郎の弟子にあたる大谷亮吉であった。大谷亮吉については本誌第五六号に掲載した橋本万平「大谷亮吉と『伊能忠敬』」において詳しく紹介されている。本稿はそれを補足する形で執筆したので、橋本論文を参照しながら読んでいただきたい。

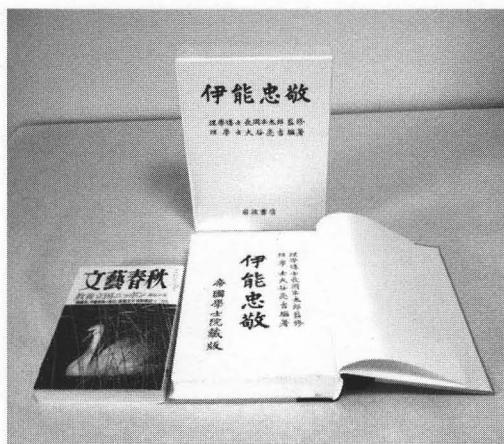
大谷亮吉（一八七五—一九三四）は明治八年三月二三日、父・圓治、母・さなの長男として現在の兵庫県姫路市で生まれた。他に兄弟はなく、一人つ子であった。生家は京都「秤座」神家の姫路の出店という由緒ある家柄であり、屋敷は東二階町という西国街道（山陽道）沿いの繁華街にあった。二階町という地名は、当時の姫路城下にあって例



外的に二階建ての商家が許されていたことに由来する町名である。街道の宿場として本陣があり、人や物の往来が頻繁な場所であった。現在、姫路駅から姫路城に向かって広い大手通りを歩いて行くと「二階町商店街」のアーケード街と交差する。この商店街がかつての西国街道であり、今でも姫路の中心部の繁華街である。大谷亮吉は江戸時代が終わって間もない明治八年にこの地で生まれ、名門の一人息子として育てられた。恵まれた環境で、おそらく非常に大切に育てられたことであろう。この大谷家の家業は度量衡を掌る「秤座」であった。

「秤座」は幕藩時代を通じて特権的な存在として君臨していたが、維新後の明治八年八月、「度量衡取締条例」の発布とともに機に大谷家は秤座を廃業し、その後は地主など豊かな資産を経営しつつ存続することとなる。生家が「秤座」であったこと、またその家の一人息子であったという境遇が、著書『伊能忠敬』に色濃く反映されているように思われる。このことについては後段で詳しく述べることとし、ここではその経歷について概略を記述するにとどめる。

大谷亮吉は明治二〇年四月、満一二歳で姫路尋常中学校に入学した。以後、その秀才ぶりについては第五六号の橋本万平の論文に詳しく述べられているが、ここに再掲すると、明治三一年東京帝国大学物理学科を首席で卒業、大学院に入学する。その後、重力・地磁気の測定事業に携わるなどしていたが、明治四一年八月から帝国学士院の委嘱により伊能忠敬の測地事蹟調査に従事することとなる。あしかけ九年の調査を経て大正五年に原稿が完成、帝国学士院蔵版『伊能忠敬』が大正六年三月三〇日付で刊行された。その後、大阪高等学校教授、京都帝国大学教授をつとめたが、昭和九年三月二六日満五九歳で他界した。なお、墓所は姫路市・名古山靈苑内幡念寺墓地の大谷家墓所にある。



※大きさの比較のため『文藝春秋』を並べた

「日本最初の実測図作成で有名な江戸後期の地理学者・大正六年、学界あげての協力のもとに刊行され、資料価値の高さは今なお評価されている唯一の本格伝記・蝦夷測量の開始から二〇〇年の節目、大方の要望に応え復刊」（「岩波書店ブックサーキュラー」より）

『伊能忠敬』—伊能測量を通して描いた日本・江戸期の科学技術史

さて、これから『伊能忠敬』について論じるにあたり、著者・大谷亮吉を紹介すると同時に、本自体についてもここで紹介しておきたい。

これがいittaiどのような書物であるのか、ということを話の前提として明らかにしておく必要があるうかと思う。以下に述べてみたい。

『伊能忠敬』の概要

体裁 四六倍版 七六六ページ

表題 大谷亮吉筆

内容 下欄の目次参照

発行 岩波書店 第一刷 大正六年（一九一七）三月三一日

第二刷 平成一三年（二〇〇一）三月一六日

第一篇 忠敬の履歴（一～二三八頁）

第一章 三治郎時代

第二章 新主人時代

第三章 中年時代

第四章 江戸修養時代

第五章 日本測量時代

第六章 晚年時代

第七章 秘喪時代及発喪後の事蹟

第八章 余録

第二篇 忠敬の測地事蹟（二三九～六四六頁）

第一章 寛政の頃本邦暦算学者及量地学者の有せし知識

第二章 忠敬所用の測量法

第三章 測量材料の調整及製図方法

第四章 測量の精度

第五章 測量に使役したる実員数及費用

第六章 忠敬所製の地図並に著書

第七章 忠敬贈与の図書並に他の蔵書

第三篇 忠敬の師友及門弟（六四七～七六六頁）

（一）麻田妥彰（二十九）戸田東三郎、大野彌三郎

『伊能忠敬』

序言
凡例

目次

伊能忠敬年譜

伊能、平山、神保三家の親族関係表
忠敬の子孫一覧表

『伊能忠敬』の出版

第五六号に掲載した「大谷亮吉と『伊能忠敬』」で橋本万平は『伊能忠敬』の発行について、「科学史の分野において、比肩するものが見当たらない程の立派な書籍を出版したのが岩波書店であつたという事は、又驚くべく、注目すべき事実であるといわねばならない。(略) その出版を受けたのが、恐らく世間にまだ名も知られておらず、従つて信用もさしてなかつたと思われる岩波書店であつた事は、どの様な経緯があり、この本の完成に岩波書店がどの様に苦労をしたかという事も、充分調査研究する価値があるといわねばならない。」と指摘している。たしかに当時の出版界の状況を調べると、創業からまだ日が浅い岩波書店に帝国学士院がこの本の出版を依頼したことでも唐突な印象を受けるし、この名譽な仕事を受けた岩波書店のほうにも、その経緯について何等の記録も記憶も残っていないというのは不思議なことのように思われる。ともあれ、この本の発行に際して、雑誌『思潮』創刊号の裏表紙に掲載された岩波書店の広告が残っているので、手がかりのひとつとしてその内容を次に掲げる。



『思潮』創刊号第1巻第1号
(大正6年4月28日印刷納本)
に掲載された『伊能忠敬』の広告

広告

新刊『伊能忠敬』 帝国学士院蔵版

「日本沿海実測の第一人者として伊能忠敬の名は小学児童と雖も之を知らざる者なし、然れども未忠敬翁の事業を眞に理解する為に洽く資料を蒐めて、科学的に研究考覈したる者あるを聞かず、忠敬翁の遺績の如きは一片の地図と一部の伝説に依つてのみ決して理解されるべき者に非ず、今や帝国学士院の事業の一として教授長岡博士の熱心なる監修の下に篤学なる星曆研究者大谷理学士が八年の歳月を費して完成したる忠敬翁の研究の世に出づるは誠に学会の慶事なり。忠敬翁の事業の背後には星学者高橋至時、器械学者間重富及其師麻田妥彰三人の隠れたる参画者あり、忠敬翁を伝ふるは即ち三人者を伝ふる所以なり。此研究に依り日本が過去に於て如何に誇る可き科学者を有したりしかを知るは学者教育家は勿論一般国民の必要知識たらんばある可からず。忠敬翁没後特に百年、学士院が男爵三井八郎右衛門氏の補助を得て之を発表せんとするに際し学士院の下命を承け此の好紀念を出版するの光榮を得たるは、弊店の最も感激する所にして、是れ実価を以て廣く天下に頒たんとする所以なり。」

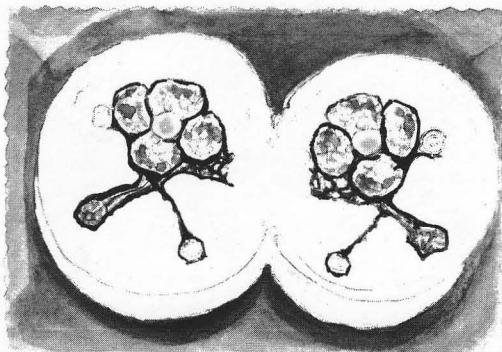
発行所 東京神田南神保町 岩波書店 大正6年五月一日
東京帝国大学理科学院教授理学博士 長岡半太郎監修
理学士 大谷亮吉編著
大判(四六倍) 八百頁背革箱入
実価四円 郵税二十銭

※この広告については第五六号の橋本論文に詳述されている。

『伊能忠敬』への評価

新刊『伊能忠敬』の広告が掲載された『思潮』は、当時の知的階級むけに新たに発行された雑誌であつたが、今、この雑誌を読んでみると、明治の知識人がたちがどのような記事を楽しんで読んでいたかが分かり興味深い。新刊書『伊能忠敬』は彼らにどのように受けとめられ、読まれたのであらうか。その一端をうかがうことができる記事がある。三月三一日付で発行された『伊能忠敬』に対し、「史学研究会」発行の雑誌『史林』七月号に小川琢治が書いた書評が掲載されているのである。小川琢治は地質学者・地理学者で京都帝国大学教授であり、ノーベル賞物理学者・湯川秀樹の父である。この書評のなかで小川は伊能忠敬の業績について、おおよそ次のように述べている。すなわち、伊能の測量は世界的価値をもつものであること、また西欧におけるギリシャの地理家・エラトステネスの例をひき、忠敬が緯度一度の測定を試みたことが、歐州地図に比較しうるもののが一気呵成にできた理由であること、さらに「伊能の業績は如何にも奇蹟の如く見えるが、其の実行された径路には何等の不思議はなく、指導者、誘掖者として此の如き良師友を得たのがその理由であり、そのことは先生に対して実に一種の天啓であつた」としている。また、東岡（※編集部注 高橋至時）は子午線一度の長さを実測する必要を切実に感じていた、として、伊能測量の必然性をそこに見出しており、さらに「『望蜀の私見』とことわった上でこの書物に対し、「地図を色刷りにして模本が添へられたならば更に一目瞭然であろうし、資料の出處が充分に分からぬのも遺憾に感ぜられる。また所在地の目録、参考書目の一覧に便なる一章を設けたらば、より一層よいものとなつたであろう」という趣旨のことを感想として述べている。

（まえだ こうこ・地方公務員）



千葉の伝統料理「太巻き寿司」 江口俊子氏画

【参考資料】

『日本学士院八十年史』

日本学士院編・刊

林 英夫著

吉川弘文館

『秤座』

『伊能忠敬の国際的遺功と顕彰人脈』西川 治

学士会会報八二三号所載

※画像資料

日本学士院

大谷亮吉肖像

『日本学士院八十年史』所収
大谷晋亮氏提供



伊能塾

第五回例会（一月十七日実施）再録①

○講演一「柏木家に残された忠敬資料」

講師・柏木隆雄さん

一、国立歴史民俗博物館収蔵の経緯について

今回は「柏木家に残された忠敬資料」ということでお話をさせさせていただきます。柏木家に伝わっている忠敬関係の資料は現在、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館（歴博）に収蔵されていますが、その経緯からお話したいと思います。

柏木家資料は本筋の私のはとこにあたる柏木俊一の家に保存されておりました。柏木俊一家には物置があり所蔵スペースがあつたので、資料がみんなそこに在つたということです。その後、佐久間達夫氏の仲介で歴博へ寄託しました。現在は整理番号がつけられ、和紙に包んで桐箱に入つて収納庫に保存されています。これを閲覧するには、寄託者であつても申請手続をして見せてもらうことになります。ちなみに柏木家の当主・長男の幹雄は皆さまもご存知の佐原「柏屋もなか店」店主で佐原商工会議所の会頭をしております。私は次男です。

二、収蔵資料のうち「伊能忠敬研究」で記述した項目

(1) シーボルト事件関連の書簡と書付（二〇〇九年／第五五号）

まず第五五号に掲載したシーボルト事件関連の書簡と書付についてです。シーボルト事件の前年に忠誨が死去しています。日本橋にあつた和蘭陀宿「長崎屋」も文書交換の場として嫌疑がかけられ調べられました。捕えられた景保が長崎通詞・吉雄忠次郎にてた書簡が何通も残っています。地図を取り戻すため奉行所で書かせられたと思われます。自筆かどうかですが、名前は自筆のようです。

(2) 近藤重蔵の長崎絵図（二〇〇九年／第五五号）
次に同号に掲載した近藤重蔵の長崎絵図ですが、これは重蔵が長崎奉行所に勤務していた関係で所有していたと考えられます。

「阿蘭陀風説書」は鎖国一二〇〇年にわたつて幕府が出島のオランダ商館長に提出させたヨーロッパに関する情報書類ですが、江戸東京博物館に世界唯一の原本が現存しています。寛政九年（一七九七）に商館長のヘンミーが幕府に提出したもので、フランス革命後のヨーロッパの動乱が記されています。これが一九九六年に近藤重蔵家筋から江戸東京博物館に寄贈され、レプリカが常設展示されていますが、なぜ秘密文書である「阿蘭陀風説書」の原本が流出したのか、それが問題です。いくつかのルートが考えられます。①天文方から流出したのではないか、というのが安藤由紀子さんの説であり、②近藤重蔵から借りて忠敬が写したのではないか、というのが私の考えです。近藤重蔵は忠敬の友人でしたが、江戸城紅葉山文庫の書物奉行という職にあり、また自身も藏書家でいろいろな書籍や絵図を持つていました。それらを忠敬が借りて写させてもらつていきましたが、その中の一つではないかと考えます。

会報第五五号に御朱印帳のことを書きました。忠敬日記の文化十一年六月の項に「近藤重蔵、御朱印帳九冊返す」とあって、これを佐久間さんは「忠敬が貸していたものが重蔵のところから返つてきた」と解釈していますが、その直前の地図御用所の引越から考えて、私は「忠敬が借りていたものを重蔵に返した」と解釈しています。

長崎絵図に象が描かれているものがありますが、忠敬は長崎で象を見てています。象はたしかに日本に来ましたが、実は幕府が受け取りを拒否したためバタビアに戻つてしましました。ですから、長崎でのみ展示されたわけで、他には見られない貴重な絵図です。

(3) 先祖書（二〇〇九年／第五五号）

では次に伊能家と柏木家との関係を伝える先祖書についてお話しします。伊能家の七代目に三郎右衛門昌雄という方がおりました。この昌雄が三男を柏木家に養子に出し、財産分与を行いました。昌雄という人は江戸の駿河台に住んで華道や茶道に造詣が深く、また横笛の名手であったと言われています。昌雄は長命でした。後を継いだ八代目・景慶は昌雄より先に死去してしまい、九代目・長由（ミチの父）も昌雄より先に死去してしまいました。

柏木家の先祖である柏木久兵衛は伊能家の筆頭番頭のように働いておりました。柏木久兵衛家は伊能昌雄の三男・柏木乙右衛門幸七の家系であり、幸七が新しく分家してできたのが柏木隆雄家の系統です。忠敬の二番目の妻・妙諦は柏木幸七の娘です。若くして亡くなりましたが、胸の病だったかもしれないと思います。

忠敬と妙諦との間に生まれた秀藏は酒に乱れることがあります、喧嘩つ早い性格だったと書かれていることもありますが、しかし——身内の弁護になりますが——数学の天才だったと安藤由紀子さんの調べで仰っています。若い時は忠敬の測量行に従い、その後は江戸の留守宅を守り、忠敬の指示に従いました。柏木家に残された文書は、あるいは秀藏が佐原に持ち帰った資料ではないか、と私は思っておりります。文書は茶箱で保存されていましたが、何点かはどうやら茶葉を干すのに使つていたらしく、紙の裏に形跡があります。

同じく妙諦の子・琴のことです。『龍ヶ崎市史』に「六女」と書いてありますがこれは間違いで、「六番目の子」というのが正しいのです。七七歳まで生きて忠誨の日記に頻出します。琴の末裔が会員の奥永渚さんです。琴が嫁に行った松田家は茨城の龍ヶ崎ですが、ここは仙台藩の飛び地でした。後年、深川の摺心院に松田家墓を合葬したので琴の墓は深川にあります。松田家はかなりの名家だったようです。

三番目の妻・ノブとは忠敬が江戸へ出る十年前に縁ができるでいます。

伊能家と桑原家は仙台藩のつながりがあります。仙台藩の藩医だった桑原家と縁戚になることについて、忠敬のほうに何か思惑があつたのではないかという推測もありますが、私は思惑はなかつたと思います。忠敬は几帳面で挨拶回りを欠かしませんでしたし、人と人とのつながりを大切にしていました。仲が良かった司馬江漢や近藤重蔵たちとの違いがそこにあると私は思っています。

この柏木家の先祖書は前半と後半で筆跡が違うので、複数人の手になつたと考えられますが、誰が書いたのかは今後の研究課題です。

(4) 法隆寺伽藍寺院境内之図（二〇〇九年／第五六号）

会報五六号の法隆寺境内絵図について、文書での問い合わせに法隆寺ではこれを嘉永年間（一八四八—一八五四）ではないかと言つていましたが、私はいや、これは文化年間（一八〇四—一八一七）の作品である、と主張しました。その後、法隆寺側でも調査して、文化年間が正しいようだと丁寧な詫び状とともに訂正してきました。

法隆寺にも伊能測量の記録がありましたが、お寺の方では測量隊のことを幕府の測量方と思わず、近隣の測量方が来たのだと思つていたようです。今回のことでは伊能の測量とわかつたので、法隆寺側にとても収穫があつたと思います。

法隆寺境内に桂昌院が寄進した大燈籠があります。金銅製と書きましたが、実際は青銅製で、境内の最も良い場所に設置されています。桂昌院の権勢の大きさというか、自己顕示欲の凄まじさを見る思いがしました。この辺りの『測量日記』には忠敬のコメント（「家康が大坂に攻め込む前に立ち寄った……等ちらちらと書き込みあり」）が入るのが読んでいて楽しいところです。

(5) 法隆寺佛閣靈宝目録 (一〇〇九年／第五六号)

(8) 地球一覽図 (三橋釣客)

(6) 江戸城御曲輪内図 (一〇〇九年／第五七号)
慶長十三年刊の手書き図です。木版刷はずっと後世のものです。

斎藤月岑の図では抜けている名前も全て入っています。このあと大坂冬の陣・夏の陣が起これ、その結果大名の配置が変わります。豊臣の関係の大名は改姓させられ、羽柴は松平・池田・・・などの姓になりました。お城の建物配置図も貴重なものです。これより後代の図は、黒塗りで埋められてしまつたので、城郭の内部がどうなつていたかはわからなくなつてしましました。

(7) 地球全図略説 (司馬江漢)

この本の作者、司馬江漢は実に多才で、手掛けた分野すべてで第一人者となっています。日本における洋画の先駆者として有名ですが、もともと浮世絵師でした。その道では「鈴木春重」を名乗つて鈴木春信の代りを務めたこともあるほどの技量の持ち主でした。

しかし江漢は性格的にあまりにやりすぎる傾向があり、「オレが、オレが……」という態度が松平定信公の不興を買うなどし、晩年は不遇でした。司馬江漢といい、近藤重蔵（殺人を犯した息子に連座して近江国大溝藩預けとなり、そこで没した）といい、親しかつた二人があまりいい死に方をしなかつたのに比べると、忠敬さんは穏やかな最期を迎えるました。充実したい人生を送つたと思ひます。

ちなみに、この『地球全図略説』の良い状態の初版本を『高橋景保一件』の著者・二宮陸雄先生が所有されています。また、須賀川在住の会員・松宮氏は同じ須賀川の銅版画家・亜欧堂田善について関心をお持ちでいろいろ書かれております。田善は司馬江漢を通して忠敬とも付き合いがあつたと考えられております。

この図は次号（第五九号）に掲載を予定しています。天明年間刊で司馬江漢とのつながりで手に入れたものかと推測されます。大きくて手彩色の綺麗な図ですが、残念ながら折り目のところが切れています。佐原の記念館に忠敬直筆の地球図が掲げてあります。忠敬さんの測量の夢は日本国内に終わらず、大陸にも行きたかったのでは、と想像されます。九十九里の広大な星空が児童体験となつて脳裏に刻まれていたことでしょう。西洋への夢、天文學への思い、まだまだ、やり足りないことがたくさんあつたのではないか。

地動説がいち早く日本に伝わって、『地球全図略説』は当時の知識階級のベストセラーとなりました。この書は司馬江漢が彼の人生の一つの区切りにあたり、銅板を入れて刊行したものです。私も忠敬さんと同じ丑年生まれで今年忠敬さんと同年の数え七四歳になりますので、一つの区切りとして柏木家に残された資料の整理を続けます。

【質疑応答】

（渡辺）妙諦さんについて、本名などの手がかりは？

（柏木）お寺の過去帳が火事で燃えてしまつて手がかりがないので、目下、「ミチ」の葬儀の参列者の記録などから割り出しているところです。忠敬さんが妙諦死去の年にノブと結婚したのはなぜか、が疑問です。

（渡辺）柏木家が伊能家と親戚だというのは歴博文書で判明したことです。親戚なのになぜ嫁にしなかつたのか、また、死因もお産で死んだのか、なぜ死んだのかが問題です。それとこの史料がなぜ柏木家にあるのか。他家の例で嫁に行くときに伊能図を持たせた例がいくつもありますから、それと同様に伊能家の文書を柏木家に分けてやつたのか、どうなのか。疑問が残りますね。

（了）

○講演二「伊能測量漫筆」講師・渡辺一郎さん
はじめに―「江戸学のすすめ」

以前、会報のかわら版で「伊能忠敬は長寿だったか」ということを私が述べたのに応えて、九州の石川清一さんが独自に調べ、「伊能忠敬は長寿だったか—階層別からみた考察—」を発表されました。当時の寿命は六〇歳くらいが平均だったらしい。すると、忠敬さんは一〇年位長生きしたことがわかりました。このように「伊能忠敬を通して見た江戸時代」―「江戸学」も面白いと思います。

私は十二年前に、「伊能測量隊まかり通る」という本を出しましたが、この本の執筆動機は、いつ・いかなる動機で・どの地図が・できたのか、ということでした。執筆にあたっては測量隊の身辺雑事を積み上げました。例えば、伊能測量隊は、大名とは違つてトイレまでは持ち運びませんでしたが、布団(数組)は測量行のあいだ持つて歩いていました。トイレも刀掛けを備えたものを設らえました。四国の沿岸測量のときは、仮設トイレが作られていますし、医者を待機させた所もありました。三、八〇〇円もする高い本が六刷までいったというのは、このようなこまごました具体的的事実が人々の興味を惹いたのではないかと思っています。

しかし一方でよくわからないこともたくさんあります。たとえば、宿泊先では浴衣を新調したのか、それとも洗いざらしの浴衣を出したかとか、また測量隊員は洗濯などはどうしたのか。下着は使い捨てということもあるかもしれないが、着た物を全部捨てるわけにもいかないでしようから、汚れものはどうしたのか。そういうことはよくわかつていないのでです。研究の余地があるでしょう。

二、伊能家の財産はどのくらい?
伊能家の財産は三万両と言われています。これは伊能家の由来を記した『金鏡類録』という伝世資料のなかに出てくる数字です。資料によれば、次のとおりです。

第一次測量の前に、佐原の村民が、勘定奉行柳生主膳正に対し、伊能家が村民のために尽くした功績を申し立て、苗字帶刀をゆるしてくれるよう願い出ます。(※忠敬はそれでも名字帶刀が許されていたが、それは領主津田氏によるもので、蝦夷地まで行くにあたり幕府からの名字帶刀が必要だったらしい。そこで佐原の村民による箱訴で願い出たが、実際は第一次測量には間に合わなかった。)

そのとき、奉行が取り調べの席で、伊能家の財産はどのくらいあるのか、と尋ねます。村民がそういうお話にはお返事できかねます、といつたが、強いて尋ねられて七、八万両もあるかと聞かれ、そうはないでしようと返事をする。ある村民が三万両くらいといわれていると答える。

『金鏡類録』はそういう経過だったと、村人の報告を記録しているだけで、伊能家が認めたわけではない。しかし、全く違う話を記録することもないのです。その的違いでもなかつたのではないかと思う。伊能家の財産三万両という話は、この程度のことでの、そう根拠があるわけではない。一両を二〇万円とすると六〇億円になる。

もうひとつ、隠居前年(一七九三)の店卸帳が残っている。こちらは、忠敬自身の数字だから根拠になる。利益が一、二六四両とあるが、これは一両を二〇万円とするとき、一億五三〇〇万円となる。三万両から持越現金八、〇〇〇両を除いた二二、〇〇〇両を運転資金とするとき

一、二六四両は利益率五・七%となる。少ないような気もするが、三万両には、家屋敷、貸家・貸蔵、田畠、などの不動産も含まれていると考えられるので、あながち収益力が低いともいえないだろう。（店御帳による繰越金は八、〇〇〇両。家に千両箱が八つあつたことになるから相当なものだ。）

三、当時のお金持ちの財産

(三) 金貸しの盲人はどのくらい持っていたか

不都合があつて、欠所になつた検校（高利貸座頭）の持つていたお金は、次のような数字だった。安永七年（一七七八）

鳥山検校 家財の他、有金二〇両、貸金一五、〇〇〇両、所持の町屋

敷一か所

名護屋検校 家財の他、有金二〇両、貸金一〇万二、〇〇〇両余、古
賃金五、〇〇〇両、町屋敷十二か所、家賃四六か所

(二) 井原西鶴の定義
ところで当時の金持ちとはどのくらいの資産家だったのか。（『江戸の風俗 町人篇』田村栄太郎 昭和三六年六月 雄山閣による）

井原西鶴（一六四二—一六九三）の諸書によると（銀六〇匁を一両として）忠敬より一〇〇年前の人だが、長者 一、七〇〇両、分限者 八、五〇〇両、金持ち 三、三〇〇両だという。百年間の物価の騰貴を無視するわけにはいかないが、この頃は、米の値段は一石、一両を中心に上下しているので、忠敬は分限者ということになる。

(四) 江戸商人の財政力

將軍吉宗の享保年間に、江戸の両替商、問屋に命じた御用金として次のような数字がある。

(1) 三越の売上高
当時のおそらくトップ企業の、三井越後屋の売上高を見てみよう。一七四五には一日あたり売り上げは、銭二、七二三、七〇〇文（松下幸子千葉大学名誉教授）というから、四、〇〇〇文を一両とするときみで二四、八〇〇両、伊能家の二〇倍となる。桁がちがうが、案外こんなところかもしれない気がする。

いくら大商人でも大変だったと思うが、差し出す力があったということである。

両替商	仙波太郎兵衛	八万両
両替商	三谷三九郎	六万両
酒問屋	鹿島精兵衛	五万両
油問屋	松沢孫八	五万両

これはまた凄い数字である。なお、江戸の金利は高くて、享保に規定された江戸の札差の金利は年二五%だったという。盲人の利息はそんなに高くはないだろうが、貸し倒れはなかつたからお金が貯まつたのだろう。

なお、江戸の地面一か所は、表六間、奥行二〇間の一〇〇坪の土地をいうそうである。これが初めは町人の一人分だったが、売却や質流れで集中がすすみ、一〇〇か所、二〇〇か所も持つてゐる大地主が出現したという。地代、店賃で年数万両になる者もあつたらしい。

また、角度が違うが、問屋株の売買価格は、町年寄より奉行へ書き出されていた。いわば営業権のような無形財産の価格である。

下り廻船塩問屋 一株 二、〇〇〇~四、〇〇〇両

塩仲買、下り酒、水油、紙の問屋 一株 五〇〇両

蠅問屋 一株一、〇〇〇両

札差 一、〇〇〇両

竹・木炭・薪 二〇両~一〇〇両、木綿問屋 一、〇〇〇両。

(五) 大名の知行を収入に換算

大名の知行一万石は、

五公五民として実収入粉

五、〇〇〇石、精米にな

おして二、五〇〇石。

一石一両とすると、二、

五〇〇両で、金持ち級に

過ぎない。それで家臣・

奉公人二〇〇名以上養う

のだから大変だ。

伊能家は一、二〇〇両

の収入があったが、従業員は酒の仕込み時で五〇

人。普段は二〇人以下だ

ったと思われる。

領主で六、〇〇〇石の

津田山城守より、余程楽



伊能洋氏画

【質疑応答】

(星埜) 伊能家で造っていた酒の銘柄は?

(渡辺) それが判らない。酒造家としての屋号もわからない。ま、銘柄は「忠敬」ではないと思うが(笑)

(伊能) 家の屋号は「源六」です。名前の由来はわかりません。

(鈴木) 当主の名前が屋号になるのでは?

(渡辺) 「源六」と「三郎右衛門」と交代ではないか。

(星埜) うちの屋号は「吉田屋」。商売ではないのですが。

(渡辺) うちは「熊之助」。農家だが。

(鈴木) 原寸大の地図を並べてみたことがあつたかどうかだが、たぶんないと思う。繋がるかどうか確かめられなかつたと思う。旧桑原家も新しい地図御用所も場所がわからないが、寺の本堂でもなければ並べられない。今回のフロア展でもお金を何十万か出して

京都体育館を借りて確かめた。あの慎重な忠敬さんが確かめもせず上呈したとは思えないが、江戸城の広間は五〇〇畳。はじめ東半分、最終で西半分を並べたと日記にある。並べられないことはわかつていたようだ。

(鈴木) 上下・左右さえ合つていればちゃんとつながるはず、という確信があつたのではないでしようか。

(星埜) 洗濯物の話だが、以前、浮世絵で洗濯物を干している図を見たことがある。

(渡辺) 旅人が竿をさして洗濯物を干しながら歩いている風景もある

そうだ。誰か調べてみませんか。

(永野) 洗濯物はあとで馬で届けたのでは? 大事なお客様ですから。

(渡辺) そうだったら必ず記録にでますね。

(了)

島原大変肥後迷惑の地に伊能図探求の旅

石川清一

九州支部平成二年度秋の研究旅行を十一月十六～十七日一泊二日の日程で長崎県島原市を行った。日程が急に決まったため参加者が井上、石川、松尾（卓）の三名と少数でしたが、代わりに地元島原史談会の有志の方四名が加わり総勢七名となつた。

当日は井上、石川が福岡から西鉄電車で終点大牟田に行き、三池港からフェリーで有明海を渡つた。島原に近づくと、一九九〇年に一九年ぶりに噴火し、翌九一年に火碎流、土石流を噴出し大災害を引き起こした雲仙普賢岳の黒々とした山塊が遠目に現われて来た。九時四〇分島原港に到着、出迎えの地元松尾卓次会員（島原城資料館専門員）と早速第一日目の訪問先、旧島原藩主の菩提寺「本光寺」に向かつた。

ここで史談会一行と合流、すぐお住職様から丁寧な説明を聞きながら、まず『混一疆理歴代国都之図』を拝見した。以前から関心があつたが現物を前に大きさにびっくりした。京都・龍谷大学のものといくつか違いがあるとのことで、特に日本の位置が異なるようです。

続いて『日本大地図』を拝観。三時間近い見学となつた。

昼は名物の海の幸・山の幸がたっぷり入った郷土料理「具雜煮」を味わつた。午後から松尾（卓）さんの案内で市内觀光スポットや伊能測量地点などを案内して頂いた。島原は江戸時代深溝松平家七万石の城下町（親藩、長崎警備を担当、「島原の乱」で有名）。又、古くから「水の都」として知られ「湧水」が多く、水路には錦鯉が放流され訪

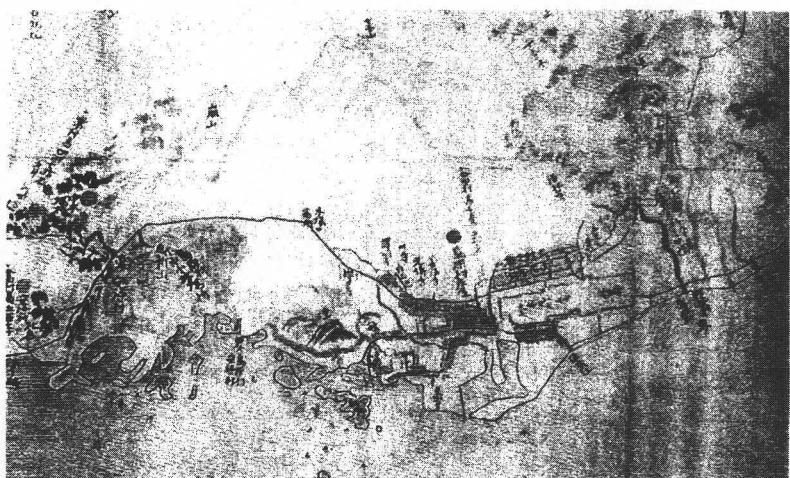
れた人の目を癒してくれる。又、市内には歴史的景観を残す武家屋敷がある。井上氏は急用のため五時過ぎのフェリーで帰宅するので島原港にて別れた。

翌、二日目は「島原図書館」で一〇時から午前中たっぷり一時間余り拝見した。ここは歴代旧島原藩主の蔵集品を集めた松平文庫。伊能図を作られたと云われている『一里四寸領内図の一部』や『島原領内地図』など多数拝見でき、松尾（卓）さんの解説で見ごたえがありました。

午後は市の郊外にある

『一里四寸領内図の一部』

全国初の火山体験学習施設「がまだすドーム」を見学した。目玉は一九九〇年十一月に始まつた雲仙普賢岳平成の大噴火に伴う火碎流と土石流を直径十四mのドーム型スクリーンで再現し、映像と連動して床が動き、熱風が吹き出す災害時を疑似体験できるシアターで臨場感がすごかつた。又、この施設の他のコーナーに松尾卓次さん監修の「島



原大変劇場」があり、観賞した。ここでは江戸時代に起きた普賢岳の噴火で対岸の熊本県まで災害をもたらしたことを、子供も大人も楽しめるように昔話風に表現した苦心の作であり、常時上映されています。

私にとつてしばらくぶりの島原で二日間があつという間に過ぎましたが、充実した旅でした。松尾先生に感謝。

・『日本大地図』寛永年間以前に作られ、幕府に提出の国絵図をもとに作られた写し

(二)島原図書館(旧島原藩主深溝松平家文庫・歴代藩主の蒐集品を収藏)

【収藏物】

- ・『一里四寸領内地図の一部』伊能図をもとに作られたといわれている
- ・『島原領内地図』伊能測量をきっかけに作成された領内地図
- ・『三会村地図』伊能測量に立ち会つた藩測量方奥村立助が領内を測量した写し図

【注】

◎「島原大変肥後迷惑」

寛政四(一七九二)年に起こつた雲仙普賢岳の噴火と津波災害のこと、島原市だけではなく、有明海対岸の肥後(熊本県)にまで大災害を与えたことがこのように語り伝えられている。伊能測量はこの後、二〇年後に行われている。

◎伊能忠敬の島原測量

九州第二次測量中の文化九(一八一二)年一一月四日~一九日まで行われた。島原大変から二〇年後であり、大噴火で生まれた海岸の島々を克明に測量しており、大変貴重な資料となつていて。この後、測量隊一行は壱岐、対馬、五島、長崎と進んだ。第二次九州測量日数は九一四日に及び全測量行程中最も長くなり、渡海を含む島々の測量や幾多の山越えの測量で七十歳近くなつた高齢の忠敬先生にとっては大変心身共に苦労が多かつた測量だったと思われます。



た本光寺所蔵『混一彌理歴代国都之図』
京都・龍谷大学所蔵『混一彌理歴代国都之図』

(いしかわ せいいち・九州支部長)

佐原支部だより

佐原支部懇談会を開催

香取禧良

年初の一月十五日、久々にて佐原支部の懇談会を開催いたしました。星埜代表理事をはじめ八名が参加、近況を交えた和やかな懇談会となりました。香取市教育長も参加され、忠敬翁の足跡は比類のないもの、大いに顕彰されたい由、談話をいただきました。本年は視察研修等を実施、佐原支部として連帯感を深める旨確認いたしました。

一月二十四日、日本山岳会千葉支部、香取市主催の講演会が開催されました。演題「忠敬翁の見た日本の景観」、講師・星埜由尚本会代表理事という内容で開催され、参加者九十数名の盛況でした。

まずは伊能図について、

- ① 「我国初の科学的実測図」
- ② 「日本列島を地球上に明確に位置付」
- ③ 「一世紀に亘って利用、近代地図の嚆矢」
- ④ 「過去の国土を知る貴重な地理資料」
- ⑤ 「高齢化社会の先駆的業績」

等概説され、参加者から好評を博しました。

本稿を取りまとめていた矢先、渡辺一郎先生から佐久間達夫様ご逝去の訃報が届きました。安藤由紀子様、伊能家伊能陽子様と続いての悲しい知らせに、何ということかと愕然とするのみです。——たゞ、ひたすら合掌。

(かとり きよし・佐原支部長)

■秋季特別展 ■
伊能忠敬の内弟子筆頭

箱田良助と 榎本武揚

2009年(平成21年)
10月3日(土)~11月23日(月)
福山城博物館、2F展示室

開館時間：午前9時～午後5時（最終午後4時30分まで）
休館日：月曜日（祝日除く）、10月31日、11月24日（祝日除く）、12月25日（祝日除く）
料金：一般500円（中学生以下半額）・高校生以上無料

御用 潟量方

伊能忠敬の内弟子筆頭 箱田良助と榎本武揚

福山城博物館

このたびは、江戸時代の歴史的背景、日本全国を測量した伊能忠敬の内弟子筆頭として活躍した、伊能忠敬の内弟子の筆頭である次男の、榎本武揚。たゆぬ若さで伊能忠敬の責任者として戦い、豊かな人生を送りました。その生涯について書かれた榎本武揚の著述を紹介します。

入館者1万人達成「伊能忠敬の内弟子筆頭 箱田良助と榎本武揚」展（福山市HP）詳細 64 頁

■『山島方位記』で美保関の日和山が判明

堺市在住　辻本　元博

伊能忠敬の測量方位角台帳重要文化財『山島方位記』六七巻に記載の測量方位角からの各地の地磁気偏角の解析過程で様々なことが判明しております。『山島方位記』には科学解析により初めて判明する伊能忠敬の未知の真価となるデータが多数含まれております。

①「現在迄の不可能」が「可能且つ実現」になった事項が山陰中央新報に掲載となりました。江戸時代の菱垣廻船や隱岐航路の重要な拠点として有名な島根半島の美保関港の「日和山」（観天望氣で航海の天候判断をした山）の具体的な位置は長年のうちに不明になっていたのですが、『山島方位記』に記載の伊能測量時の三保関（美保関）「日和山」の測量方位角から未知の地磁気偏角1.02、西偏の解析過程で「日和山」の詳細な位置が緯度経度の秒単位小数点以下第二位迄明らかになりました（※次頁記事参照）。『山島方位記』で判明する伊能忠敬測量隊が実際に測量器を据えた詳細な地点の一隅に立つて、どの山をどう測量したかを知ることは勿論、約二世紀前そこで行われた伊能忠敬測量隊の測量を足元から実感でき感激します。

②伊能忠敬の松江での療養逗留先であり『山島方位記』に記載の松江の測量基点でもある松江末次京屋萬五郎邸の灘座敷（宍道湖岸の庭園）の測量基点の詳細位置も『山島方位記』の解析と測量日記及び地元史料の照合で判明しましたが、その折及び今回の投稿でも

尽力を賜った松江市文化財審議委員の乾隆明氏と、『山島方位記』解析の小生の煩雑な計算を改善して一貫解析演算システム化していた（有）山陰システムコンサルタント（境港市）の面谷明俊氏との全国の先端を行く松江、出雲平野、境港、米子周辺での『山島方位記』の解析と地元還元活用の活動が今後注目されそうです。

③『山島方位記』の解析で伊能測量時の地磁気偏角と歴史地理データが多数判明中です。拙論も掲載の京都大学大学院理学研究科附属地磁気世界資料解析センターのHPのセンターニュースを参照ください。

(次頁へ続く)



国土地理院地形図

『山島方位記』から復元した美保関日和山の位置、馬着山頂上手前の十字の中心で測量隊が測量を行った

伊能測量隊と三保関（美保関）日和山余話

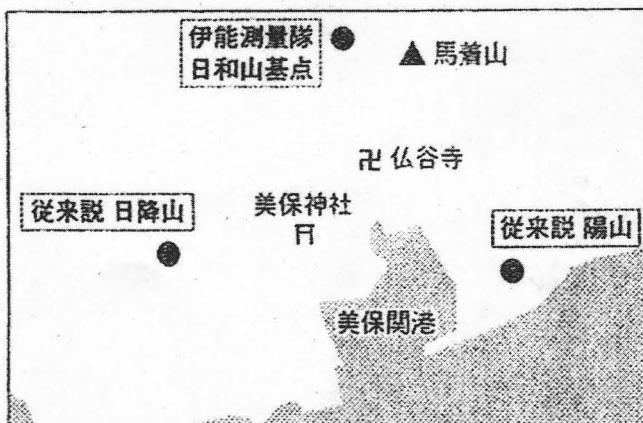
島根半島東端の三保関（美保関）日和山頂上での測量基点は馬着山（バチャクセン）二一〇mの頂上の北西手前の一九〇m等高線上で、ここを基点として二回測量が行われた。六月二十日に日和山で一回目の測量をして、二十三日に三保関から隠岐へ出帆するが、逆風に押し戻され、南東の赤崎に漂着。二十六日、瘧（おこり）マラリアに罹っていた伊能忠敬他三名を残し、赤崎から直接隠岐に向かって出帆したが、航海できずまた三保関へ戻った。二十七日に日和山で二回目の測量を実施（但し、測量日記には記載無し）、七月三日に出帆し、翌日に隠岐へ到着。一回目の測量の測量対象は中国山地と島根半島方向の四山で方位角も四件のみと簡略であるのに對して二回目は隠岐の山や島十三地点を含む合計三六地点、方位角は一三件にのぼる。

東の倉吉、鳥取方向は馬着山の頂上でないと見えないが、東には頓着無く専ら複雑且つ広範囲な隠岐諸島の全体像の把握と引き続き測量する島根半島北岸と宍道湖及び中海南岸に関連する方向を主眼とした測量であり、隊長不在下での測量を全うする為の一心不乱を物語る。美保関の町中を北へ仏谷寺（ブツコクジ）の墓地の左（西）横の薄暗く草木生い茂る急な山道を登ると客谷峠（客さんの峠）の客さんの祠（ごとう）に至る。（客さんは他所から村を守ると同時に、外來の人を大切にする当地の客人（マロウド）信仰）客さんの祠から右（東）の馬着山頂上方向の山道を辿り、頂上手前の登りの山道の標高一九〇mのすぐ左側（北側）のやや平らな稜線上が日和山の測量基点の位置です。足元の日本海から隠岐諸島、島根半島の山、三瓶山、中国山地脊梁の山々、伯耆大山、宍道湖、中海、米子、弓濱半島が一望です。今自分が立っているわずか一〇mぐらい四方の狭い地点で嘗て伊能測量隊が測量したという事実を体感できます。』山

島方位記』から見つけた街道の曲がり角の測量基点などでは道幅四分程度の範囲内ですから驚きます。『山島方位記』ならではの測量基点詳細位置の解析復元の世界です。尚、測量基点の詳細位置の復元には地磁気偏角（磁針偏差）の解析と算入が不可欠になります。（了）

（辻本元博）

三保関（美保関）日和山の位置関係



山陰中央新報 2010.1.9

■佐賀新聞「伊能陽子さん安らかに」 武雄市在住 馬場 良平さん

伊能陽子さんのご逝去を悼む馬場さんの追悼文が佐賀新聞の「読者の声 ひろば」欄に掲載されました。馬場さんは昨秋、かねて研究中の伊能忠敬と山領主馬・司馬江漢・佐野常民との関係について研究会例会にて照会し、伊能陽子さんより伊能家に残された書簡資料の提供を受けました。この経緯を紹介しつつ、陽子さんへ哀悼の意を表されました。なお、この書簡は会報五八号「芳名録」に掲載されています。

■佐賀銀行社内報に馬場さん「伊能大図を歩く」が掲載されました。

【記事内容】平成二十二年一月十五日、佐賀市中心街で開かれた「BO OKマルシェ佐賀2009」の一環、「200年前の佐賀を歩こう！」で佐賀県立図書館所蔵の佐賀県周辺部の伊能大図（複製地図）が公開されました。ビニールで覆った約十六畳分の広さの地図の上を歩いて見学出来、ほぼ二〇〇年前の佐賀が目の前に広がる光景の中で、伊能忠敬の偉業とその測量技術の正確さを体感できるめったにない機会でした。

伊能陽子さん安らかに

武雄市 馬場 良平(59)

伊能陽子さんは伊能忠敬研究会の中心的なメンバーとして、世田谷伊能家に伝存していた史料を分析・整理し、文

江戸時代の測量家・伊能忠敬の子孫である洋画家伊能洋りつが、佐野常民の東京麹町の夫人、伊能陽子さんの「お屋敷で行儀見習いをして計報を聞いたのは1月25日のいた時、母親から娘にあてた夜遅い時間でした。突然の」明治24年（1891年）7月計報に驚きました。思えば昨年10月、伊能忠敬に残っていて、そのコピーをと山領主馬、司馬江漢、そして佐野常民との関係を、東京いたのです。極めて個人的な内容の手紙で史実的な意味はないのですが、伊能家と佐野で、伊能陽子さんから貴重な常民の関係を物語るものとし

ます。

（伊能忠敬研究会会員）

「佐賀新聞」 2010.2.2



▲「伊能大図」で200年前の佐賀を歩こう！

「SAGIN 2010新春号」No.349 2010.1発行



お便りから

■石川清一さん（福岡市）

伊能陽子さんの訃報には大変びっくりしました。本当に残念です。

■伊藤栄子さん（練馬区）

伊能陽子様の件では残念でなりません。私は杖をつき乍ら長く歩けませんので御葬式は失礼させて頂きました。亡くなられる二日前にお電話でお声を伺つたのが最後でした。私よりも十才もお若いのに悔やまれてなりません。人生とは空しいものですね。

■加藤忠三さん（岡崎市）

ご無沙汰しております。本日着きました「伊能忠敬研究」を開き、安藤由紀子さん、伊能陽子さんの計報を知りました。

安藤由紀子さんは、昨年の総会ではじめてお目にかかりました。現在、常陸太田の高和家の文書の翻刻をやつていていることで鳥羽伏見の戦いの話となり、私の家が幕臣のことから、話が大きいに盛り上がりました。その後メールのやり取りやら、翻刻した高和家文書の一部を送つていただきました。

ほんのひと時でしたが、高齢にもかかわらず、コンピュータを扱い、意欲満々の安藤さんにお目にかかれることは何よりでした。

二〇〇〇年の伊能ウォーカーが静岡を通過した際、私は静岡に講演に来た渡辺一郎さんに文章を手渡しました。それがきっかけで渡辺さんが

伊能家に在った静岡の下図をコピーしたものをお送ってくれました。この時伊能家の原図からのコピーを許していただいたのが陽子さんでした。この下図をいただいたのがきっかけで、静岡の伊能忠敬にのめりこみました。何度か電話でのやり取りや、総会でお目にかかりお話ををして、伊能忠敬の下図をもらつてから一〇年になります。この間退職し、人生の終わりに向つていますが、退職後は伊能忠敬をキーワードに、さまざまなおとの交流が生まれ、さまざまな探索を行い、充実した毎日を送っています。その意味で伊能陽子さんに感謝しています。

静岡の下図をもらつてから一〇年になります。

■伊藤栄子さん（練馬区）

本年は他界される人が多くて淋しい事でござります。実は、愛媛県西条市の会員菅哲彦氏が一月三日に亡くなられました。私は三十年に亘るおつき合いでした。名簿から又お一人少くなるのは悲しいことですが、こゝにご報告申し上げます。右よろしくお願ひ致します。

■河島悦子さん（筑紫野市）

一月二十五日以来ずつと悪夢を見ているようです。老少不定、生者必滅、会者定離・・・そんなこと分かつてます。でも、陽子さんにかぎつてそんな不義理はする筈がない！安藤由紀子さんと仲良しだからといって二人仲良く旅立つなんてあんまりだ・・・同じ言葉を毎日ブツブツつぶやいています。

佐原にペイレ図が里帰りしたとき以来のご縁で、よく電話でお話しましたね。

その名の如く太陽のように明るく、よく動く大きな瞳で私たちを包んでくださいました。江戸博

の八百善で食事を一緒にしたり、北九州の長崎街道、伊能ウオーカーで五島福江島を歩いたりと思ひ出はつきません。彼女からプレゼントされた最大のものは古文書を読むことをすすめてくださいたことでしょう。

未だ道半ばですが、今度あの世でお目にかかるころは堂々と胸を張つて読めるようになります。

天国の住所が決まりましたらお知らせくださいお便りします。

河島悦子



お知らせ

例会報告／第六回



日々の話題

- 新聞記事『朝日新聞』（東京本社版）三月二十三日夕刊「惜別欄」に伊能陽子さんの追悼記事「測量の大家の遺品守り」（清水弟記者）掲載。
- 雑誌記事ちばざん総合研究所発行『マネジメントスクエア』二月号／二四〇号に「ちばビッグプロジェクト『伊能忠敬の日本地図作成』」が掲載されました。（十二月に取材を受けました）

今年最初の例会には15名の会員が出席しました。講演に先立ち、1月4日に逝去された安藤由紀子さんを悼んで全員で黙祷をささげました。

- 第六回例会（一月例会）一月十七日（日）
- 講演一「柏木家に残された忠敬資料」
- 講師・柏木 隆雄さん（講演内容は五〇頁）

- 講演二「伊能測量漫筆」
- 講師・渡辺 一郎さん（講演内容は五三頁）

- 講演三「伊能忠敬研究会」

【一部紹介】「伊能忠敬の多様な魅力に迫り優れた研究成果を上げる *伊能忠敬研究会』《伊能大図を発見》伊能忠敬の研究や関連イベントの実施で多大な成果を上げている研究団体、それが伊能忠敬研究会だ。会員約200人。その所には、日本をくまなく測量して回った忠敬らしく全国に広がり、忠敬関連資料の発掘、調査、研究、記録を地道に続けている。・△厚みを増す忠敬研究』忠敬には多様な魅力があります。精巧で、芸術的な伊能図そのものの魅力。それに伝記的興味。時代によって着眼点が変わりますが、現代ならリタイア後の充実した生き方ですね。また、忠敬自身が残した測量日記などの資料や、忠敬が訪れた各地の有力者や藩の応対が書かれた資料など、文書への興味。こうしたさまざまの関心を持つ全国の会員から、粒ぞろいの原稿が集まります」（事務局長・鈴木純子氏）

■雑誌記事『週刊ポスト』八月二八日「ライフワーク」シリーズに松平定知元N H Kアナウンサーの「日本人よ、覚醒せよ！ 伊能忠敬の列島縦断4000歩『生涯現役のセカンドライフ』に学べ」が掲載されました。

- 展覧会『伊能忠敬の内弟子筆頭 箱田良助と榎本武揚』が二〇〇九年一〇月三日から一月二三日広島県福山市福山城博物館で開催されました。日本の歴史に影響を与えた親子の史実に来館者は一万人を突破しました。（五八頁参照）

■伊能忠敬記念館

☎ 0478・54・1118

第66回
期 間 3月24日（水）～5月23日（日）
展示品 伊能大図（富山・新潟県付近）

貞享曆
贞享曆

伊能忠敬の多様な魅力に迫り
優れた研究成果を上げる
伊能忠敬研究会

伊能忠敬の多様な魅力に迫り
優れた研究成果を上げる
伊能忠敬研究会

伊能忠敬の多様な魅力に迫り
優れた研究成果を上げる
伊能忠敬研究会

お知らせ

- 復元伊能大図巡回フロア展
- ◇小金井市 4月30日～5月3日 小金井体育館
- ◇松江市 6月24～27日 松江市総合体育館
- ◇伊予市 8月5～8日 しおさい公園体育館
- ◇新潟市 8月14～17日 朱鷺メッセ

伊能忠敬研究会御案内

伊能忠敬研究会のホームページ
<http://inoh-tadataka.org/> (休止中)

一、 本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
二、 つぎのような活動を行つております。 『会報』—原稿締切と発行予定—

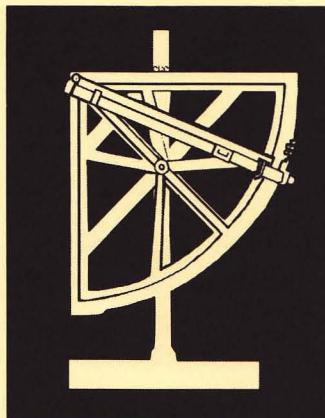
①会報の発行

発表誌 原則として年四回	第 60 号締切 3月末 発行 5月	②例会・見学会の開催	第 61 号締切 6月末 発行 8月
③忠敬関連イベントの主催または共催	第 62 号締切 9月末 発行 11月	④その他付帯する事業	第 63 号締切 12月末 発行 2月

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.59 2010



TOPICS I

- Historic Spots about Inoh Tadataka (9)
- "Sokuchi-Genko-Zu" as Manuscripts of Inoh Maps
- 210th Anniversary from the Start of "The Inoh Survey"
- Place Names Related to the Year of Tigar

Kunishige Masaki	1
Editorial Department	2
Hoshino Yoshihisa	4
Saito Hitoshi	5

TOPICS II

- "Denshoji-Temple" where Inoh Tadataka Stayed
- Place Names and Landscapes in "*Inoh Daizu Soran*" (13)
- TV Programs about Tadataka's Life and Achievement
- Two Traditions about Stones Related Inoh Tadataka

Kunishige Masaki	6
Hoshino Yoshihisa	7
Sakuma Tastuo	18
Kawashima Etsuko	22
Watanabe Ichiro	24

MEMORIAL ADDRESS

ARTICLES

- Study of Inoh Tadataka (9)
- Enomoto Takeaki's Times and Languages
- Kashiwagi Family Documents (5)
- Fine Book "*Inoh Tadataka*" (3)

Ishiya Haruka	26
Itoh Eiko	36
Kashiwagi Takao	42
Maeda Koko	45

INOH-JUKU

- Kashiwagi Family Documents about Inoh Tadataka
- The Inoh Family's Property

Kashiwagi Takao	50
Watanabe Ichiro	53

BRANCH REPORT

- Study Trip of Kyushu Branch
- Social Meeting of Swara Branch

Ishikawa / Baba	56
Kakimi Soichi	58

MEETING ROOM

- Letters from Members Daily Topics and Informations

Editorial Department	59
----------------------	----

Edited and Published

by

THE INOH TADATAKA SOCIETY